

兰学纲要

第一卷

特別  
14  
3152  
52



14  
3152  
52



95-109

美學概要

序論

美學は美及藝術を論究する科學なり

を以て美の成形とすれば、美の概念によりて判約せられ、その

の中に包含せらるゝが故に、美學は美の科學なりといふのみ

にても足るの感なきにあらざらん。然れども吾人は、後論する

如く、美は單に藝術の境域に限り、そのみならず、實際その反對する

術は、美(特殊の意義)に於けるのみならず、實際その反對する

醜をも併せその目的と爲すが故に、美學の定義は最初掲げ

し如くにして始めて、全きを得といふべし。然れども吾人は

尚ほ如上の定義を他の方面より考察せざるべからざらん。他な

し、此の定義たる全く假設的性質を有するものにして、二



個の豫想の上に立てるものなればあり。一は即ち美は實際に存在すといふ者。換言すれば美なる概念は真理を包有す。とす。豫想にして他の一は其美に就いては單に之を感ぜざるに止まらば之を知るを得とす。豫想あり。美學に對する一般普通の謬見は如く措て之を論せずとするも既に美學の歴史に於て多くの疑惑は以上二個の豫想に關して存するを見るべし。一方はありては美に絶對の意味を與ふる者。許さば美を以て偶然的暫有的且純主觀的の者。他方にありては美學の始祖バウムガルテンの如く美を以て混惑且昏迷せる寫象とすし美の明白ある知識即ちその科學的認識は全く不可能のものありとす。如きは是也。

されは近頃の美學者は美學の此困難を避けんとす。その系統の發端は假定として美學の定義を置きその定義は單に豫想の上に立つものなればその真理なることはやがて系統全体によりて證明せられ得るものなり。然れども是れ論理的循環の上に立つものなり。その假定せられたる定義より論断せる美術系統もその定義と同し真理を有するものとす。可からばてか、る美學は何等の哲學的根底なきものなるのみならず又た何等の科學的知識を具へざるものなり。

真及善の二觀念も亦た此困難の位置に存するものにして科學的研究の基礎及形式としては到底その絶對的旨趣を解する能はず。單に契約的のものとなり時と共に變化す。



味及判断は全く個々の人の偶然的趣味に非ればその偏頗  
なる性情に基くといふが如き誤解を有すればなり。

真善美の三概念が全く主観的心靈の境域に属すること  
はその心靈の本質を考察すれば直ちに明にふるべしとい  
へども簡單にいへば下の如きふり。主観的心靈の境域の  
下部即ち高等なる獸類にありては客観的理解性は或は是  
れあらざるも、主観的理解性は是あり。故にかゝる境域  
にありては真善美の觀念なく真に對する現實善に對する  
利用美に對する愉快を知るを得るのみ。又た同じ反對の概  
念を取りて之を言へば、動物に對する非現實善に對する動  
物的寫象として意を  
有するものあり。上に記せし美は偶然的變異的趣味によ

感

り制約せらるゝ物件の性質ありとの謬見も亦動物の有す  
る實踐的快樂と同じき愉快の範圍に着眼せるより来りし  
ものなり。普通の人的心靈を形成する主観性は、かゝる偶然  
なる主観的趣味を言ふに非ず。二者は同トク主観性とい  
ふべきも一は高等なる主観性よりして普通の性質即ち合理的  
必然性を有するに反し他の一は劣等なる主観性よりして不  
必然に偶然なる趣味の主観性たるに過ぎざるものなり。  
吾人の上を記せしものは單に緒言たるに止まるのみ。今  
や更に進んで有意識的有理性とし主観的心靈多少無意識  
的なる客観的有理性と正別していふの中進入し美なる  
觀念普遍的意味をいふは、その心靈の有機組織の必然的  
要素として如何なる位置を占むるかを見む。

# 別頁

第三編 美の普遍的觀念

第一章 主觀的心靈有機組織の必然的要

素としての美

第一節 主觀的心靈の本質

主觀的心靈なる概念は、二様の對概念を豫想す。即ち觀性對する客觀性と、心靈對する外界即ち天然と是なり。前者は後者とは決して截然區別すべきも非ず。何と云はば、心靈的主觀性を有する人、即ちいへども、實體的存在として、即ち天然の中に存在するもの、外は之も反して天然の中にも單に物理的偶然の事變のみを非ずして、有理的心靈のその中に存在するを認む。たゞ主觀性即ち意識の形式は

## 題

於て存せしめて無意識の形式として存在するもの別あるのみ。人として一の吾人は、心靈と天然との結合より成り、その心靈は吾人の第一要素として、その天然は吾人の第二要素であること、猶ほ男女の關係に於て、男性の第一要素自動的として、女性第二要素受動的であるが如し。第二要素は完全である調和の状態に在らば、常に争闘の中を存し、第一要素は次第に第二要素を征服し来るものとす。要するに、人類並に個々の人間に就いて見ると、~~第一要素は~~ 兒童時期、少年時期、青年時期、第三心靈の天然を征服せる時代、壯年時期、即ち蓋し心靈と天然とは無限の發展過程を極ける二要素を形成するものとして、

開

その開展の終極目的は心霊の天然の控制を全し脱却して  
心霊的自由に到達するにあり然れども心霊の人間として  
は天然の要素と分離すべからざるが故に、自由の到  
達は絶対的の意味を有するに非ずして相対的意味を有す  
るものなり。換言すれば自由は到達せんとする無限の能力  
即ち永久なる可成の形式を了解せらるべきものなりとす  
程に於て吾人はその心霊活動の三方向を分つを得一第  
一認識第二感覺第三直観是なり認識は在りては自動的要  
素(心霊的)その多き居り居りては受動的要素天然  
的その多きに居り直観は在りては二要素互に多寡なく  
平等の位置にあるものなり然れども其の多寡自由の分子

を有せざるは在り何とすれば自由に向つて能力一つ  
つある主観的心霊の活動の外なるものは在り故に直観は  
直観といへども動物の直観とは異りて自由の意味を有す  
是れ美の觀念の動物に存在せしめて人間に存在する所以  
なり

自由なる語は通常倫理的意味に用ふ(政治的社会的意味  
に用ひらる、場合之を除き)然れども自由は單に倫理の  
範囲に限らざるべきものにあらず吾人の心霊は三方向に活  
動して自由を求めつゝありとすれば自由は又認識及美的  
直観の範囲にも存せざるべからざる換言すれば心霊の本心  
の自由は意志の側より在りては善認識の側より在りては真直  
観の側より在りては美といふべきなり然れども自由は



絶對の意<sup>義</sup>時にて存在するにあらば一<sup>義</sup>相對的の意<sup>義</sup>もて  
 存在するものありが故に善あると同時に惡あり、真あると  
 同時に<sup>偽</sup>偽あり、美あると同時に醜ありて、互に制約しつゝ、  
 あるものあり、若し真善美の三觀合が絶對に存在すとせば、  
 善も醜もなし、又た心靈と天然と<sup>若</sup>若合して<sup>後</sup>後して存在し得る人  
 故に存し美は醜あるが故に存するものならず、善は惡あるが  
 例へば初生児白痴者及獸類にありては、自由は未だ發生せ  
 ざるか、或は枯死せるか、或は存在せざるものにして、為<sup>る</sup>る  
 倫理上罪あるものを有せば、従つて又徳あるものもあらず、  
 等を稱して罪なしといふは、道德的價值以外ありと云ふと  
 同し、<sup>偽</sup>偽と同一く彼等は又認識に對する真<sup>善</sup>真直觀に對す

る美醜を區別する<sup>能</sup>能力なき<sup>外</sup>外に出づる能はざるもの<sup>對</sup>對する  
 全く肉体的興味

第二節 主觀的心靈の天然位置

吾人は主觀的心靈の<sup>開</sup>開展過程に於ける<sup>三</sup>三  
 式即認識感覺及直觀<sup>の</sup>の<sup>三</sup>三<sup>の</sup>の<sup>形</sup>形  
 心靈の天然<sup>の</sup>の<sup>對</sup>對する<sup>の</sup>の<sup>位置</sup>位置<sup>を</sup>を<sup>就</sup>就いて<sup>一</sup>一<sup>言</sup>言す<sup>べ</sup>べし<sup>と</sup>とす<sup>べ</sup>べし<sup>は</sup>は  
 關係を論ずれば、何故に主觀的心靈は<sup>開</sup>開展過程に於  
 て三と限られ<sup>た</sup>た<sup>か</sup>か<sup>の</sup>の<sup>活</sup>活動形式を有する<sup>か</sup>か<sup>の</sup>の<sup>三</sup>三者<sup>の</sup>の<sup>間</sup>間の  
 關係は如何なるものなる<sup>か</sup>か<sup>の</sup>の<sup>疑</sup>疑問は自ら<sup>に</sup>に<sup>氷</sup>氷解す<sup>べ</sup>べし<sup>は</sup>は  
 なる<sup>べ</sup>べし<sup>と</sup>とす<sup>べ</sup>べし<sup>は</sup>は

天然なる語は前に論せしことあり、如く二<sup>の</sup>の<sup>意</sup>意義<sup>を</sup>を  
 有する<sup>べ</sup>べし<sup>一</sup>一は主觀としての人間に對する客觀世界として

17

吾人

一は具體的人體その動物として存在する天然的要素はなり。従つて心鑿の自然に對する位置も亦二様あり。一は自我以外の客觀界に對する位置として。未だ自覺に至らばには主觀客觀の區別は單に意識として未だ自覺に至らば換言すれば動物の有する客觀的意識と稱するものと同一にして自我は外界に對して主觀体たりとの意識を有するのみ然るに一歩進んで吾人が自我其者の認識をなすに至れば吾人は動物の意識以外に超越せるものありて之を自覺といひ吾人は動物の開始して自由を有するに至るものにして又吾人が動物より高等なる所以あり。他の一具體的人體その動物も存在する天然的要素即ち肉體に對する位置より見るも人類の動物に比して高等

動物の開始して自由を有するに至るものにして又吾人が動物より高等なる所以あり。他の一具體的人體その動物も存在する天然的要素即ち肉體に對する位置より見るも人類の動物に比して高等

ある所以を知るべし。自我が肉體と合一して二者を分たざる場合は即ち無意識の場合にして人間も動物も其の之あり。吾人は之を感覺といふ。意識は天然の外面的發見を意味するが如く感覺は天然の實在として自我の内面的發見を意味す。兩つをみれば天然の發見は外に在るも一は外に之を發見し一は之を内より發見するの差あり。意識の最初の活動は知覺にして感覺の最初の活動は欲求なり。知覺欲求は動物の有するものなり。動物の進んで自由的認識となり欲求の進んで自由の意志とあるに及ばず。之を動物に求むべからずして獨り人間に於て求むべきものなりとす。

論トてふ、に至れば吾人は二つの疑問の新に起り来

8

執

るを見るべし第一主観的心靈の<sup>開</sup>展過程に於ける活動形式の一ある直観<sup>が</sup>他の二形式即ち感覺と知覺<sup>と</sup>對し<sup>て</sup>如何なる位置を占むるものありや<sup>の</sup>疑問第二<sup>の</sup>その三形式の何れが原始的<sup>の</sup>もので<sup>か</sup>他の二はそれより派生せしものとすべき<sup>の</sup>必然<sup>も</sup>然れども<sup>の</sup>二疑問に關して先づ注意すべきは<sup>原始</sup>の語あり<sup>若し</sup>原始なる語を以て主観的心靈はその初<sup>に</sup>單に感覺的のものありや<sup>又</sup>單に知覺的のものありやを定め<sup>る</sup>とするれば<sup>開</sup>展なる事實は全く考ふべからざらざる<sup>べし</sup><sup>の</sup>第一<sup>の</sup>小兒の<sup>長</sup>じて<sup>壯</sup>年と<sup>至</sup>るに至る過程に徴するにその初<sup>の</sup>感覺<sup>の</sup>發現<sup>後</sup>の意識<sup>の</sup>發現<sup>も</sup>れどもその感覺と<sup>より</sup>意識と<sup>より</sup>べき要素は<sup>小兒</sup>の時<sup>の</sup>前後<sup>の</sup>存在<sup>する</sup>ものあり<sup>の</sup>開<sup>展</sup>の上<sup>に</sup>於<sup>て</sup>時<sup>の</sup>前後<sup>の</sup>早<sup>く</sup>に

實

あるのみ之を要するに主観的心靈は根本的に分つべからん<sup>の</sup>その三個の活動形式も根本的に存在するものありて唯だ<sup>その</sup>開<sup>展</sup>の時<sup>を</sup>同<sup>じ</sup>と<sup>す</sup>るのみ<sup>の</sup>意識と感覺とは既<sup>に</sup>開<sup>展</sup>せる上<sup>より</sup>考察<sup>すれば</sup>一は純理的<sup>の</sup>ありて一は實踐<sup>的</sup>のあり<sup>の</sup>故<sup>に</sup>互<sup>に</sup>矛盾<sup>せる</sup>の<sup>観</sup>なき<sup>非</sup>ずといへども決<sup>して</sup>矛盾<sup>せる</sup>もの<sup>は</sup>非<sup>ず</sup>例<sup>せば</sup>人<sup>の</sup>開<sup>展</sup>は<sup>心</sup>靈<sup>的</sup>要素と<sup>天</sup>然<sup>的</sup>要素と結合<sup>せる</sup>もの<sup>な</sup>れども<sup>二</sup>要素は決<sup>して</sup>全く<sup>矛盾</sup>せるもの<sup>は</sup>非<sup>ず</sup>る<sup>が</sup>如<sup>し</sup>た<sup>と</sup>天然<sup>の</sup>付<sup>け</sup>心<sup>靈</sup>的<sup>要素</sup>少<sup>く</sup>心<sup>靈</sup>は<sup>天</sup>然<sup>的</sup>要素<sup>少</sup>き<sup>の</sup>差<sup>ある</sup>のみ<sup>の</sup>直<sup>観</sup>の場合<sup>は</sup>此<sup>の</sup>二<sup>要素</sup>正<sup>に</sup>平<sup>均</sup>せ<sup>る</sup>もの<sup>あり</sup>て<sup>純</sup>粹<sup>なる</sup>認識<sup>も</sup>非<sup>ず</sup>又<sup>純</sup>粹<sup>なる</sup>感覺<sup>も</sup>非<sup>ず</sup>ら<sup>中</sup>位<sup>を</sup>占<sup>む</sup>るもの<sup>あり</sup>極<sup>言</sup>すれば<sup>認</sup>識<sup>と</sup>感<sup>覺</sup>と<sup>非</sup>ず<sup>之</sup>を<sup>有</sup>し<sup>その</sup>認<sup>識</sup>

知

は純理的にも非ず、実践的にも非ず、又その感覚は実践的  
も非ず、純理的にも非ず、故に直観は認識と感覚との中位あり  
との中位あり。直観は認識と感覚との中位ありと  
も之を以ての故に、認識と感覚とは之より分岐発生せし  
のありと考ふべからず。認識直観、感覚は同一の根源より各  
別に発生せるものあり。小児の体躯の発生に於ける  
が如し、小児の体躯の発生するや、先づその一部発生し、その  
後、他の部分発生し、その次、又他の部分発生するが如き  
ことあり。各部は同時に発生するものあり。之と同しく、主観  
的、心鑿の活動形式もありし、一個の中心ありし、それより  
同時に異なれる方向に開展するものあり。而してその中心  
中心とは自由即ち是なり。

類

自由の要素あるが故に、人間の認識、感覚、直観は、獸類の  
之に相當する活動形式と、分つことを得るなり。初生児とい  
へども、之を初生獸と比すべからざるは、自由の要素あるが  
故なり。人間は、その始めて生るや、獸類の如しといふ者  
見山亦甚しといふべし。獸類の如く、や初生児より  
も、機關の発達完全ありて生る、や否や、四肢を動かす、且歩  
行す、初生児ありては、その起つて歩むるまで、多しの時を  
要す。之を要するに、獸類の発達は速かにして、又速かに完結  
す。人間はその如く、や発達遅きか如しといへども、自由の要  
素ありによりて、その発達は又無限あるを得るものあり。  
下等動物ありても、全く意識、感覚、直観を有せざるに非  
ず。認識、動向、意志、動向、形成、動向は之を有す。たゞ自由の要素

を欠くが故に、天然の必然性より制約せられ、その形成動向  
 美術製作となり、その意志動向、道徳となり、その認識動向  
 言語能力となる。人或は唯物主義  
 の着眼点よりして、蟻蜂蜘蛛の驚くべき技能を以て、下等動  
 物も完全なる美術的動向を存在せしむ。甚しきは人間の  
 美術製作も遠く及ばずとある。勿論人間の美術製作は、  
 完全といふべからず。その完全といふべからざるは、即ち人間  
 の美術的発達の無限なるを證するものに外ならず。動物の  
 美術的動向を完全ありといふは、即ち天然の必然性より生  
 せるものにして、全く自由を有せざるものなり。蜂窩若くは蛛  
 網の驚くべきは、猶ほ金石の結晶の驚くべきに同じく、全く  
 天然の必然性より生ず。雪片貝殻珊瑚等の美麗なる形状と

い（ども、また）と同一の約言をれば、人間と下等動物との活  
 動を分つべきものは、自由の存否、即ち是れなり。

第三節 意識と感覺と對する直觀の  
 本質

吾人は本節に於て、前節に揭げられたる疑問の解答を試み  
 る。主觀的心靈の發展過程に於ける三つの活動形式は、  
 その発現の時を異にするも、同じく根本的に存在するもの  
 なるは、前に述べた通り。然れども、以上三者は、その發展に  
 於て同等的な位置を占むるものとはならず、あるに、吾人は、  
 其の發展の三階級に於て、論ずる所あり。亦如く、感覺も、  
 ては全く受動的にして、主觀的客觀の中を没するものなる  
 こと、意識も、ありては自動的にして、客觀的主觀の中を没  
 するものなり。

するものあり故に甲子ありては意志生じ乙子ありては認識生じ直観は正子自動的受動的の二要素を融合して具體的協和の位置にあるものあり。かく二要素協和平均せるが故に直観は快活性を有するを得。又想像及び美術的成形の根底たるを得るものあり。獸類の遊戯は同じし直観より来る。たゞ人間の遊戯と異なり自由を有せざるのみ。獸類の遊戯するや内部の快活性を認むるを得。此の快活性は全く反對する二要素の協和よりして生ずるを得るものあり。然れども獸類の直観はありては單に外界に於ける着目よりして欲求生じ自己存在の幸福ある感情に之に従て生ずるものよりして亦た小児に於ける如き想像の存するを見む故に自由の分子を缺けるものありとす。直観を意識

12. 及感覺より區別すべき特徴は意識にありては心靈即ち自我の自動的方面多き居り感覺にありては天然即ち自我の受動的方面多きに及びて二要素は直観に於ては全く平均せしめられ換言すれば直観にありては心靈と天然自由と必然意識と感覺自動性と受動性と互に協和平衡せるものあり。直観に於ける此の調和的一致は直観の絶對的動作即ち創造力を有する所以なり。此の創造力は創作的想像若くは美術的成形力に發達し天才の意を有するに至るものあり。天才とは即ち二要素が調和協和して成れる直観より来る力に外ならず。本細は下巻美術論に記す。認識の對象は外部にして感覺の對象は内部されども直

能

能

能

観ありては **二**者 **は** 調和せらる。何と云れば、  
 直観的主観と對 **し**、外部は同時に内部として感ぜられ、  
 内部は同時に外部として知らる。 **これ**は **なり**、  
 言へば直観にありては外部の現實は單に現象となり、内部  
 は反して現實として寫象せらる、ものあり。故に現象は客  
 觀的關係に於ける直観の内容を形成し、寫象は主觀的關係  
 に於ける直観の内容を形成するものあり。吾人は次に現象の  
 論する **あり**、  
 第四節 直観の對象及内容としての

現象

現象は二つの意 **義** を有す。一は現ける、或るもの、即ち對象  
 一は直観的主観に顯はれるもの、即ち假象、  
 是 **なり**。

宜しく

現象の **二**意 **義** は 區別されざる **や**、  
 の觀念を定むる上に大なる關係を有すればなり。美の觀念  
 は全く主観に **依**るもの、即ち假象の上を存するもの  
 ありて、その對象の實際に於て何たる **か**、  
 現象に **二**意 **義** ありよりして直観する **と**、  
 文字の別を生ずる **なり**。

認識及欲求の對象は現實の物体とさる **や**、  
 直観の對象は物体 **に** 非ずしてその假象なり。例 **ば**、  
 斗羅列せる **天**空 **に** 詩的詞章は全く假象を指示するもの  
 あり。詩人はその星の間の距離 **を**、  
 幾千万里を以ても測 **ら**ず、  
 知らざらざるものありを **知**り、  
 又 **天**空 **に** ありて星が  
 附着せるものに **非**ざらざる **も**、  
 然 **れ**とも **あ**る **事**は **科**

然 **れ**とも **あ**る **事**は **科**

學的認識の範圍にして詩人の問はざる<sup>こと</sup>詩人はたいてい  
その眼子映するまゝを取らる。天空を仰<sup>て</sup>星斗羅列  
したるが如き假象を得れば、直ち之を言ひ表はすに過ぎ  
ず、直観は認識とその対象を異にするのみならず、又感  
覚と之を異にする。詩人の句を取りて之を<sup>證</sup>せよ、  
人のめづるは星斗羅列、  
壯麗のためこそ。

といふお如く、星は欲求の対象たる能はざるも、美的快感即  
ち直観の対象たるを得<sup>る</sup>故に直観的心靈の範圍は假  
象の世界換言すれば美の世界なり。さればハイゲルは「美は  
その生活を假象の中に有すと」へるなり。  
直観に對する觀念の美なることは、上に論せしが如し。然

れども「美は積極的意味に於ける美をいふのみならず、消極  
的意味に於ける美即ち醜も亦之に屬せざる可からず。其惡  
が道德の範圍に屬する如く、<sup>非</sup>眞が認識の範圍に屬する  
か如く、醜は直観の範圍に屬せざる可からず。積極消極の  
兩者を合せる意、<sup>一</sup>は美醜をも含むは直観的心  
靈に對する純假象の世界なりとの定義を下すを得べし。  
定義は即ち主觀的心靈の本質を<sup>分析</sup>し得る結果として必然  
的成立せしものにして、唯一の豫想をも要せざるものなり。

第五節 美と醜

美の普遍的觀念(中性的觀念)は必然の結果として二分さ  
れざるべからず。美と醜は主觀的心靈の有する自由は、



自然の必然性と争闘するよりして、**始め**て獸類の範囲を脱して人間の範囲に入るものなり。

故に自由の存する所即ち必然の存する所にして、**従**て

心靈の活動形式はありても消極的要素の**絶對的**必然

然るに**存**するを**見**るべし。換言すれば非真理に陥る傾向

ありて**真理**を犯すべし。傾向ありて**美**なる感情を**存**す。

**道德**の**存**し**醜**なる感情ありて**美**なる感情を**存**す。

非真理罪惡及**醜**の存在は悲しむべき必然といふべき

必要といふからに**何**と**も**は**美**術の**美**を構成する

るは**美**のみならず**醜**も**必要**の分子たるは**掩**ふ

可からざる事実なればあり。醜とは如何なるものか

必ずしも一定の分子からなるものあり。例は男

子に於て**美**とする時は**女子**に於ては**美**からざる**如**し。男子は**力**

及**強**硬性の発現を**美**とすれども、**此**等は**女子**に在りては**反**

て**醜**とふるを見るべし。女子は**服従性**及**感**動性を以て**美**

とすべし。此等は**男子**に在りては**叛**抗からざるを見るべし。

道德の例に見るも亦た異なる。男子の徳とすべき**大膽**、

勇氣は**反**て**女子**の**缺**点として**女子**の徳とすべき**柔順謙**

遜は**反**て**男子**の**缺**点なり。蓋**男女**は**天**然**及**心靈の二

要素より成るべし。その比例同し。然らば**男子**は**心靈**の分子

多きを在り、**女子**は**自然**の分子多きを在り。故に**男子**は**美**

とすべし。女子は**自然**の分子多きを在り。故に**男子**は**美**

る可からず故に醜美の分子は之を絶對に定むるを得ず  
るしの子、その場合如何よりて或は美なり或は醜なり  
のありしを、美とす、或は之を崇高と婉美との例に照していはば、  
崇高に於て美とす、或は廣大偉大強大等の分子を、婉美の場  
合に充つれば醜とす、或は婉美に於て美とす、或は細小柔軟婀  
娜等の分子を、崇高の場合に充つれば醜とす、或は如し、故に  
醜美は絶對に定むべきもの非ざる也、  
美なる觀念に對して積極的意を有する、即ち美なる物  
体の性質し、その度を過ぐれば消極的意を有するに至り、  
醜に変わるは明なる事實なり、例へば畏敬は崇高の必要分  
子、或はともその度を過ぐれば恐怖、驚異、奇怪とす、或は  
婉美の必要分子、或はともその度を過ぐれば妖媚、輕佻等と

あり、或は美たる能はざるに至る、此等醜美の關係は、後子至  
りて詳し論ずる所あり、可し、  
一と直觀部内の必然的分子あり、故に同様に美の觀念  
を形成するに必要あり、と記す、  
吾人は獸類の如く、外界を直觀し、その止まるも  
の非ざる、外界に附隨せる缺點を知覺するもの  
は、吾人の主觀的心靈は自由を有する、故に獸類の  
如く自然に服従せず、  
を發見するものあり、  
突生す此現實と觀念との矛盾、  
吾人の有する抽象的普遍的觀念は、美より、善より、真

よまれば、**現實**より比して、その積極的意義を有するに至るもの也。現實は自ら法して**美醜**、**真非**、**真善**、**真惡**等の別を有せり。吾人が自由より直観し、之をその本質上より倫理的に感覺するよりして始めてその別を生じ、**醜**を除き、**美**の觀念を以てして生ぜしむる結果を得るに至りては吾人はその現實に附随せる消極的分子を即積極的意義を有する**美**の觀念はのこして到達せらるるなりといへども、**醜**の分子なければ**美**の觀念は生ずるもの非ざる、**美醜**の關係は**真非**、**真善**、**真惡**の間に存するもの也。フラスト中(天人)の**歌**、**天帝**が**ス**トに就きてひける語に、

いま人間の活動は、**衰へやすきもの**にして、つかれはて、は忽に**ト**、**やすみ**の時を、**わが**、い、**いで**、**彼**、**等**、**に**、**友**、**を**、**あ**、**た**、**ト**、**刺激**せしめ、**つ**、**鼓舞**せしめ、**惡魔**を、**は**、**て**、**長**、**に**、**は**、**た**、**ら**、**か**、**し**、**め**、**ん**、**の**、**世**、**に**、**醜**の**美**子に於ける**猶**、**メ**、**フ**、**イ**、**ス**、**ト**の人間に於るが如き事、何とあれば、**醜**の直観を**刺激**するありて**美**は始めて生ずるを得るものなれば、**實に醜**は**美**の**具體的**の**成形**子に於て**缺**とて、**か**、**ら**、**ざ**、**る**、**もの**、**に**、**て**、**抽象的**の**美**の**現實化**せらる、**は**、**全**、**く**、**醜**の存在より、**因**、**り**、**て**、**美**の**抽象的**(**中性的**)**概念**は、**往々**、**理想**と混同せらるるものに、**事**、**實**、**上**、**より**、**云**、**は**、**真理**を、**現**、**實**、**を**、**も**、**含**、**ま**、**さ**、**る**、**もの**、**な**、**ら**、**ず**、**醜**の**美**の**矛盾**するありて、**美**の**抽象的**の**概念**は、**その**、**具體的**の**内容**を得るに至るものなり。

若し此理を解せざれば美の概念を關して誤謬を隔る  
 る免れざるものとす。古代にありし普遍的人の美の理想即  
 ち實際の個體成形の中、男性女性の差を併有せる美の最  
 高理想を考へられ得べきものとす。たるが如き、即ち  
 の誤謬を除外するに古代に有る彫刻家ポリクリテト  
 及びギリジツポの如きは、る普遍的人の美を美少年の  
 形に於て表出せしめんと力められたる。その結果やたゞ男性  
 の特殊なる美性を和げたるに止まり。近代にありても、  
 シケルマン及びルヘルム、フォンボルト氏の著「ヘルマ  
 ン及ドロラ」(註釋)を解釈を見よ)等の如き、る普遍的人の  
 美の理想を可能とす。かゝる理想を個體的成形の上で表  
 出せしむは、必ずや必然的に相容れざる両性男女の矛盾に

類

隔るに非れば、天然に反對せる無性のものとす。了るの理  
 を度外視せるもの、如し元素人間ある中性的概念は、自身  
 自身にありては、假有のものあり。換言すれば、男女たる具體  
 的形象を離れて存在すべからず。従て具體的なる人の美  
 は常に或は男性或は女性として存在するものあり。普遍  
 的人的美は決して具體的に存在すべきもの、非に從て  
 を寫象することを得ざるものなり。

かゝる具體的美は醜の分子のありて初めて現實化  
 せらるるものあり。換言すれば、美は反對せる醜と關係し  
 て始めてその積極的意味を有するものあり。故に或る形象  
 を美と感ずる為めには、それと同時に醜と感せらるべき形  
 象も現在せざるべからず。美醜二者の相互的關係は、美の

如何なる種類にも見らるべきものとして美なる陽的部門  
の存在は同時に醜なる陰的部門の存在を制約するもの  
吾人は尚ほ進んで詳細に美及醜の概念を考察せしむるに先  
ず直観の物質的條件としての感官の部門につき論究す  
る所ある可からん醜の哲學的意義を知らざれば余の  
著「美學」の批判的歴史を参考す可し

第六節 直観と感官との關係を論ず

直観と謂へば全く視覚に關係していふが如くあれども時  
間的直観の内的直観等の語あるよりして見れば單に視覚  
の範圍のみ限らるべき非ず吾人が直観を以て直観に  
視覚に關係するもの、如く思考する所以のものに吾人が  
現象として外界を最も能く視覚して知覚するものよりあり

換言すれば他の感官は皆外界に關して一部の感覺を吾人  
と與ふるに止まれども視覚は或一定の度を超て全き宇宙  
を映寫するあるを以てあり感官の感覺はその初め純粹な  
る受感性即ち精神の受感的方面よりして心靈の三活動形式  
と同しく三種に分つを得べし曰感官知覺同感官感覺曰感  
官直観是より感官直観の感官知覺及感官感覺に對する關  
係は正し直観の認識及意志に對する關係と同一なり即ち  
感官知覺は對象の性質に關係するが故に純理的よりして感  
官感覺は主観の性質に關係するが故に實踐的なり感官直  
観に至りては對象の主観的映象を目的とするが故に純理  
的よりあらん又實踐的よりあらざるあり  
のみ直観及び感官直観共に純理的若くは實踐的の關係

を有て本現象界に對して執着なきを以て視覺及び聽覺の  
二が最も直觀に必要なる感官たるは白から明かたり何と  
おれば客体の現象形式時間空間に適合せしは視覺聽覺の  
二者のみを以て餘の感官嗅覺味覺觸覺に至りては客体  
の物質的性質に適合せしめしめて美的直觀に不適當な  
ればなり  
尚ほ詳  
軟性温熱弾力性の如きものは關係し味覺はその化學的性  
質に關係し嗅覺はその物質的性質に關係するものなり  
美は快不快の感を生ずるべきは美醜の概念を生ずる能はざ  
るものなり吾人は或物の臭若くは味は美なりといふと安  
らしその美と緬出るものは形色若くは音の美と混同して

視るべきもの非ざる吾人は或る美を或る味を  
を美はしといふことありこれともその反對に或る味を  
を味を醜といはずして不快若くは思といふは嗅覺味  
覺に謂美の視覺聽覺に謂美と異なるを知るべきなり  
也蓋し視覺及び聽覺は現象の時間的形式若くは空間的形  
式に關係するものにしてその物質的性質に關係せられはな  
り然れば視覺及び聽覺は美醜の感のみありて快不快の  
感なきかと云ふに然らず快不快の感は又視覺聽覺の有す  
る所なり何とすれば視覺及び嗅覺は美とする者は醜  
快しし醜とする者は不快なればなり然れども  
反對に醜は快なるものは美にして醜は不快なるものは醜  
ありといふを得ず試す之を獸類に見よ獸類は視覺及

ひ聴覺を有れどもその感するは快不快のみにして未  
尤醜美を分つものあらざるなり

視覺聴覺は上り述べたる如く高尚なる感官にして  
者の存在を以てのみに對象を現はる、現象と主觀と映せる寫象  
と全く一致するを得て、直観を可能ならし  
むるも吾人は想像と幻想との區別を論じ美學の  
範圍は想像に非ずして、想ふるの理由を明して、と想  
像はその根源を外部の受感性にあり、故に獸類は  
も想像は可能なり、想像は外感によりて腦裏に收得  
せる物象を再生するに過ぎず、主觀的自発性の  
分子を含みざる、故に想像は視覺聴覺に關しての  
みならず、爾餘の感覺に對しては可能なり、吾人は食物の画

に對するときは、味覺を刺激して唾液を生ずるが如き  
は全く想像より来るものあり、然るに主觀的心靈の自発性は  
能くかゝる想像の受感的なるを變じて、外物の支配を  
超越せしむるに至りて、想像は一層高尚なる境界に入り、  
心の要素として美術的成物の原動力となるものあり、主觀的  
心靈は自発的活動として、幻想を有し受感的活動として  
は想像を有す、想像と幻想とは自然の異なるものあり、  
幻想に關しては、後に詳論するものあり、  
如く幻想も亦相對的意味を有するものあり、即ち幻想は

他非  
唯知

美性の探求あると同時に醜性の発見あるを猶真理の到達が  
 同時に非真理の認定よりして善を欲するは同時に悪の中  
 に陥れるものなるが如し之を要するに美的觀念の必然は  
 幻想の形式よりして美性を欲求するとの必然より来る  
 か、ある美的觀念の内容は如何に分割され、もたれりや  
 換言すれば美的觀念はその美に如何なる要點若くは階  
 段を於て分るものなるかの疑問に答ふるは即ち美學の  
 任務ありとす。

第二章

體質的概念として善の觀念

第一節 空間と時間

(現象の形式) …… 共起と継起

(直觀の形式) …… 靜穩と運動 (兩形式の合一)  
 現象界の事物は圓滿完全ならず、抽象的の善も實現せ  
 られて具體的となる時は、現象界に属するを以て、不圓滿  
 不完全の性質を加へ来り、或は善となり或は醜となりて、相互に  
 對立するに至る。又現象は空間と時間との中に顯現せる  
 事態ふれば空間と時間とは現象の形式なり。(註五参照)  
 空間上の<sup>縦</sup>整横は直観して現象を直観する時は同時に多くの  
 事物を直観するものなり、其状態を共起といひ時間上の  
 前後は直観して現象を直観する時は時を異にして漸次多くの  
 事物を直観するものなり、其状態を継起といふ。(註六)



秀照 かく空間と時間とは、其は現象の形式として相対立  
 し、共起と継起とは、其は直観の形式として相対立するを  
 以て、現象の形式と直観の形式とを併せて更に廣義の之  
 を解釋すれば、両々對立せる二形式の基礎として静穩と運  
 動とが相対立するを知らむ。されば静穩と運動とは、現象  
 は於ても直観は於ても相対立し、實は美の開展せる歷程  
 は、其の對立を見るあり。即ち一切の美は静穩の美なる  
 の、將在運動の美なるの、二者實一なりとす。  
 静穩の美と運動の美とも對立せしむと雖も、既に俱  
 は美と云ふ、其の基礎は於て兩者の間は均一の点なくば  
 あらざる。静穩と運動とは、果して共通の点を有し得べきや。  
 現象界の動靜は相對的あり、現象界は絶対的の静穩

もふく、絶対的の運動もふし、故にエレア季派が眼を映  
 ずる運動の可能性を全然否定して、俗に所謂運動あるも  
 のなしといひしは、一切の對立を抽象的に解釋せし結果  
 あり。物体の運動の漸々速度を減するに静穩とあり、静  
 穩の物体は力を待て遂に迅速なる運動とふるあり。而して  
 静穩と運動との間には固より劃然なる境界線なし。絶  
 對的といへば、静穩も運動も亦無差別あり。静穩の美  
 と運動の美も亦斯の如く根底は於て均一なる所あるも、  
 説明の爲に之を區別せるのみ。されば今普遍的美の基礎  
 とありて對立せる二種の美を論せしを、曰く静穩の美  
 即ち崇高、曰く運動の美即ち婉美。  
 第二節 美の種類——崇高と婉美

抽象的といへば、静穩は、**運動力**として運動を攝し、運動は、**静力**として静穩を攝す。之を現象上よりいへば、静穩と運動とは別**殊**として**相對立**せり。崇高は、**静穩の美**として、**婉美は運動の美**とすれば、静穩と運動との間、存する**相對的關係**は、又崇高と婉美との間、存する**互贅せず**として、明

なり。八註七参照

### 第一

崇高の**類別**

美的内容が開展するは、**美的形式**は開展せるものあり。崇高及婉美の開展も亦、**形式**の如く、内容形式の平行開展をなす。かくして吾人は物質界より漸次、**心靈界**に上昇す。是自然の順序あり。今崇高を分類し、**果發達開展の順序**に従ひ、**逐次之を説明**せん。

物質界を直觀せれば、**形式**は唯**延長**のみのみ。而して、**延長は直觀**せる人と**外界現象**との間、於ける**数量的**の關係として、或る**状態**を表現せるあり。外觀を直觀せるとき、**外觀の延長は漠然**吾人は認識せらるべきも、吾人が常に認識せる程度を超えて、**非常**に高く**非常**に強き事物の**外觀**に際會して、之を**寫象**せれば、**精神**は**測定判断**に苦み、一種異様の感を生じ、之を**崇高**といふ。又崇高も**量的崇高**と、**性的崇高**の二種ありて、**量的崇高**は**延長の崇高**とあり、**性的崇高**は**内面的崇高**とあり、**又之を外延的崇高**といひ、**又之を勢力崇高**といふ。勢力は天然力と精神力の二種ありを以て、**勢力の崇高**も**天然力の崇高**と**精神力の崇高**との二種あり。然るに**物心**は**元劃然**なる**區別**あるものあり。

天然界と精神界とは不断の連鎖中に在るを以て之を基本として喚起せらる、崇高としても元々類する非が次第に發達して階級を成せるのみ、故に崇高を精密に分類すれば左の三段となる。

### 外延的崇高

- (一) 延長の崇高、即ち専ら外延的なる崇高
- (二) 天然力の崇高、即ち外延的にして内包的なる崇高
- (三) 精神力の崇高、即ち専ら内包的なる崇高

外延的崇高とは延長の偉大なるを見て起る感ふり、之を別して空間的崇高及時間的崇高とす。空間的崇高とは雲霄を衝きて巍然なる高山の如き、涯漠底測られざる海洋の如き、茫漠として際限なき平野の如き、列宿の運行する蒼天の穹窿の如き、其他苟くも無

限の延長として眼に映る現象皆是なりとす。加之、星斗燦然たる光彩を放ち、海無際を揚げ、山嶽峻峻あるあるは、更に一層の感を深ららむ。一碧千里、波瀾起らざる海面の如き、或は星なき闇夜の天空の如き、無限の延長は、固より崇高の感を起さずも、変化なくして餘り、單調の思感有り。之は反して、寂寥たる焼野の景色の如き、或は一、二、三、構閣を覆ひしたる颯風の如きは、平穩單調の夢を破りて、人をして恐怖の境へせらしむるものあり。天地自然の變化に對して吾人は直観の自由を有し、之を客観的に觀察する時、崇高の感あるべきも、若し天変地異の激烈なる為、直観の自由を失ひ、一身の安危を顧慮するに至りては、崇高の感は一変して恐怖の念とあるなり。世人多くは朦朧

と微冥を以て崇高は欠ぐべからざる原因とせしむるも、吾  
 人を以て之を見れば必ずしも然らざるものあり。太陽の  
 光線が雲霧の爲に遮られ、朦朧として僅に事物を認むる  
 時は、總て其大を誤り、或は物体と己との距離を誤認し  
 て遠く物体を認むるの類は、皆光線屈折の如何に基き、事  
 物の全體を擧げて五里霧中、向らしむるを以て、之は對する  
 決して崇高の感起す。又闇夜墓道を過ぐるが如き、或は  
 岩洞窟坑に入り、僅に微冥を存し、深處に延び、遂に四面  
 闇黒となる時の如きは、直觀の自由を失ひ、及て想像力を逞  
 めし、疑心暗鬼を生じて、怪靈の襲來する及き、之を憂ひ、崇高  
 の反對極ある恐怖が全心を支配するに至る。之は保日、世  
 俗の言取るに足らざるを知るべし。若し夫れケルンの高  
 塔の如き、或は埃及の金字塔の如き、古色蒼然なる大建築を  
 見れば、崇高の感自ら湧出せしむ。是空間的崇高と時間的崇  
 高とが相集りて、崇高をして益々深遠ならしむるに由るな  
 り。人的活動も亦、天然の偉觀と全くとく崇高を展開せしむ  
 る。而して人的活動は多く時間と互れるが故に、時間的崇高  
 を論じて、人的方面に及むべし。

時間的崇高は、狭義にいふ時は、靜穩の美に非ずして、運動  
 の美なり。時間上に規定せらるる現象は、總て生滅を免れ  
 ず、生滅するは運動の形態なればなり。之を廣義に解釋  
 すれば、一種の形態を具へつ、長時間に亘れる運動ありて、  
 更に、その形態を概括し、之を寫象し、之を直觀せるときは、時間  
 的崇高の感を起さしむ。吾人の所謂運動は、無限の運動なり、

決して崇高の感起す。又闇夜墓道を過ぐるが如き、或は  
 岩洞窟坑に入り、僅に微冥を存し、深處に延び、遂に四面  
 闇黒となる時の如きは、直觀の自由を失ひ、及て想像力を逞  
 めし、疑心暗鬼を生じて、怪靈の襲來する及き、之を憂ひ、崇高  
 の反對極ある恐怖が全心を支配するに至る。之は保日、世  
 俗の言取るに足らざるを知るべし。若し夫れケルンの高

論

無窮の運動に至るとは問題外なり。『無窮』の観念は吾人直  
観の範圍外ありて時間を超絶せざるが故に、時間的業  
高の説を以て之を律をべからざるなり。無窮の運動とは、  
一直線上に於ける運動の如き者非ず、大なる円周上に於  
ける運動即ち是のみ。絶対不動の一点を中心として其周  
に畫かれたる円周が絶対的不断的運動をなすが如し。或  
は蛇が其體を巻き渦狀を成して其尾を嚙むの圖を描き以  
て無窮の運動を表示せしは、其當を得多しといふべし。詩  
人ハラーは神の廣大無邊際を借りて、無窮の観念を歌う  
て曰く、

恒河沙の教、山をなし、  
无量永劫の時を經つ、  
終極のしるし見へしとき、  
そのいた、まゝのほりつ、

御空の神をおろがめば、  
無限の教も今はたゞ  
汝が一塵は過ぎざりき。  
また身をうへし、降り来て、  
仰けは元のまゝ、よして、  
なれ我前にた、せけり。

億兆の教如何に大なるも、一定の際限ありて無限は非ず。  
山をなし、時を經るといふは、空間時間は直れるが故に、  
之を以て空間時間を超絶せる無限の観念を説明すべから  
ず、ハラーは詩を以て簡短に之を説きなり。總て古  
き事物を見れば、崇高の感あり。ヘズビウス噴火の爲に長  
く埋伏せしホムペイ市街が再び發墟せられし如き、又は上  
古埃及の大建築なる金字塔が今日も儼存し、那翁が其下を  
過きて古色蒼然たる、驚きと云ふが如き、唯に崇高の感  
覺を喚起せられざるは外ならず。人間しては白髮の老

地底の



一撃の下は恨を吞て死に就き、<sup>こゝろあはれ</sup>思ひ來り、一片の同  
情の涙を濺ぐを禁せず、崇高の感は何時しを去りて、悲哀の  
情益増し遂は天然力を恐怖するに至らん。天然現  
象の時として恐るべき勢力を發するを知るも、天  
然現象を制止して災害を脱却するに能はずば恐怖は  
更に進み仰敬の情を生じ、天然現象を神化して之を崇拜  
するに至らん。古代民族間に盛に流布せし天然教の起源  
は皆存するあり。此の如く崇高の感と仰敬の情とは  
相待ちて爰に如て激烈なる天然現象の觀察を全するも  
なり。

外界現象の外延と勢力實現の強度とが權衡を得て、靜  
止と運動との配合整齊する時は、<sup>まごころ</sup>真欣態すべし精神的崇高

の域に入り、欣容をるに華麗、<sup>まごころ</sup>威尊、<sup>まごころ</sup>嚴肅、等の詞を以て  
すべし。所謂日の出は崇高なる現象として、大なる靜止の中、  
自ら一定の運動をなす。太陽が東天の雲を破りて燃  
出づる色彩を現はし、燦爛たる光輝を放し、如何に華麗ふ  
るもの。その紅玉盤白蒼天に沖し世界の支配者として吾  
人の地球を照せば、如何に威尊嚴肅なるか。ゲーテはフアラ  
ストの神曲、天人の歌の發端に、太陽の嚴肅を叙して曰く、  
日は列星ときをひつ、  
むらしのまゝの 天の樂、  
留響一聲、と、ろきて、  
定る旅はおけりけり。<sup>\*</sup>

天の樂、天人ララアエルが星宿の無窮なる華麗を稱讚  
せし詞より太陽の音曲を奏せるとは希臘の哲學者ピタ  
ゴラスが列宿音曲を奏して諸音皆整齊ありといふも基

くピタゴラスは萬物悉く數より成ると云ひ、之を音  
樂にて証明合志多り、天然の配合宜しく多くの天体の集  
りて音の整齊を成さふり、兩りて列星の音曲は古人々  
聞はば聞へずと云へり

雷の音に近似せしめ、音の整齊にて雷響を寫象せんと試  
みしは、恰も古人が列星の音の整齊と譬べし觀念を喚起  
せしむ。又飄然として虚空を飛翔する大鷲の如き、一帆風  
に驕りて港灣を發する船舶の如き、高き絶壁より瀉下す  
る瀑布（ナイヤガラ大瀑等）の如きは皆泰然として物よ  
動せざる風向り、静止と運動との整然配合せらるるを以  
て、見る者をして威嚴的崇高の感らしむ。而して威嚴

崇高

ある崇高は他の分子を加はるる魂と云ふものあり。

(四) 精神力の崇高 上來客觀界の事物を主として、崇高

を論じたりしが崇高の本質は、精神の自由活動より  
起る。蓋崇高は觀察する人の心内起れる状態なれば  
なり。抑も精神は自由活動せんとする性向り、而して外  
界の現象は夫れ一定の規矩向りて支配せらるる、が如き  
を以て、精神は之が爲に壓制せらるる、心あり故に速に  
束縛を脱して自由活動を為さむとす。即ち自然界と精神  
界とは相反掙する可如し。然れども身心は到底離るべか  
らず、之を一個人に見るも精神と肉体は對立平行して發達  
をなし、養の範圍は其用の開展する所、一は直觀とあ  
り、一は感覺とある。欲望は感覺を根源として開展するも



は、  
のなるが、其本質を發揮して之を激發せしむるは、精神  
力熱情の秋態とふるべし。

されば熱情の崇高は天然力の崇高と精神力の崇高との  
両性質を兼ね備へ、天然の方面は根柢を有する精神力の  
發動非常に強く従て又直觀の度も高き故に崇高とあ  
りしふり。實に熱情は感覺と直觀との両方面に跨る。今  
夫れ情は盲目あり、然中熱情は最も盲目あり。熱情の發  
動せる秋態を呼び、盲目なる念、盲目なる嫉妬、盲目  
なる憐愛』と云ふは正鵠を穿たり。人君に熱情の自由活動  
を任せて之を鎮靜するは、なくば、崇高の秋態中、潜  
伏せし消極的因子、大に活動を始め來り、美は一轉して醜  
いなるあり、愛が偏頗となり、醜が嫌忌となり、熱心

が狂亂となるの類皆然らざるはふし。之を要するは、盲目  
なる熱情を御せざれば嫌忌となり、憤怒となり、不平となり、  
殺人ともふるものあり。

91.  
精神力の崇高を秋態上より説くは、大略此の如し。次に、  
其内容を論ぜんに精神力の崇高は種々の秋態とありて現  
はる、と云ふも、其單純なる秋態は品位あり。品位ある人  
の心身偉大にして華麗あれば之を畏敬し進んでは其威尊を  
認む。品位備る人とは、常に外秋の品位あるに止らざる性  
貴むべく、其情敬むべく、士人の龜鑑なる人をいふあり。唯だ  
外秋の養は流れ、言行痛く、尊大を衛し、虚驕ある人は固より  
品位なく、寧ろ冷笑侮蔑せられぬのみ。人は理想に到  
達せんとする欲望ありて、欲望と熱情とが相待り、崇高と

なる。斯の如く理想に向て進む情を、進励といふ。進励は外形に顯れて品位とあり、内心に動いて理想的熱情となる。理想的進励は現實界の束縛窮屈を免れんとする活動力として、心靈は之を對して常に戦ひつゝ、ある。初は天然界の束縛に向て争ひ、次は強者の暴戾を服せんとするが如き、國家の制度を改めんとするが如き、社會上の束縛に向て争ひ、終は非理想的の情を對して理想的の情が戦ふが如き、自ら内省して精神中に戦を生じ、概して之を謂へば二種の相及撥せる執力。心は戦ふもの、即ち是なり。例は親子の愛が男女の愛と戦ひ、或は一家の愛が國事の盡瘁と相容れざるが如き、皆然らざるはあり。かゝる境遇に際會せる人は、理想的性質を失はざる限りは、於て個人と

感して事情に適合するを要す。更に一步を進むれば、悲劇の感とある。悲劇の情が美術上に實現せらるゝ、詳細の理論は、美術論に譲る。

精神力の崇高を積極的に解釋するも、大略上の如く、之を消極的の方面より論じて、此節を終らんとす。欲望に善の欲望と惡の欲望との二種あり。善の欲望は熱情と結合して崇高の感を生じ、品位・威嚴・畏敬等の積極的状態を顯現し、惡の欲望も熱情と結合して崇高の感を生ずる。異なるものも、其状態は消極的なり。ジャコブ・沙翁作オセロ中の人物は己の利害己の愛憎の爲に、強りに他人の尊き性情も犠牲を供し、彼が卑劣なる行為に對しては、何人も崇高の感を起す。悲劇中に向る尊敬すべき人物

オセロの類に對する柳場として、シヤゴリ一流の悪役も、必要なるに相違なきも、悪事を働くを見ては、彼を惡むの餘り、速く死せんとを希む。アリストテレは悲劇曲上の人物は、觀劇者に恐怖と全情を起さしむるを要せしむ。シヤゴリに對しては恐怖も亦く同情も亦く唯一個侍奸の徒として之を輕蔑せしむのみ。沙翁は之を借りてオセロの人物を高からしめ多りの。其他マリネリー(悲劇エミリヤ、カロツチー中の侍人)カルテ大佐(シラー作)加バレ、ラウンド、リリーベを見よ)フランツ、モーア(シラー作)デイ、ロイバーを見よ)等の人物皆是あり。又位高く爵尊しと雖も個人として不道德ある上に威權を笠着て暴行を逞うせる人物(エミリヤ、カロツチーに在る殿の如き)は亦輕侮を以て觀らる。然りと雖もエミリヤ、カロツチーに在る殿の如きは、其意志強固ならず、熱情に駆られて本心を失へる点より之を侮るも、マリネリーの如きは、其陰險なる人をして恐怖の感を起さしめ、悪魔の再來せるかを疑はしむるものあり。かゝる光景を見て、果して崇高の感あるや否やは人物の主觀的動機如何に存せ。先行の動機が吝嗇、嫉妬、肉慾等の如き劣等なる根底より來るあらば、吾人は之を輕侮せしむのみ。若し又名譽の奴隸、權勢の渴望等の如き比較的高等なる高等なる根底より來る。沙翁のリチヤード三世の如き)あらば、吾人は猥りに之を蔑視する者に非ざらん。沙翁の劇曲リチヤード三世の初に下の言あり。

照映

オセロの類に對する柳場として、シヤゴリ一流の悪役も、必要なるに相違なきも、悪事を働くを見ては、彼を惡むの餘り、速く死せんとを希む。アリストテレは悲劇曲上の人物は、觀劇者に恐怖と全情を起さしむるを要せしむ。シヤゴリに對しては恐怖も亦く同情も亦く唯一個侍奸の徒として之を輕蔑せしむのみ。沙翁は之を借りてオセロの人物を高からしめ多りの。其他マリネリー(悲劇エミリヤ、カロツチー中の侍人)カルテ大佐(シラー作)加バレ、ラウンド、リリーベを見よ)フランツ、モーア(シラー作)デイ、ロイバーを見よ)等の人物皆是あり。又位高く爵尊しと雖も個人として不道德ある上に威權を笠着て暴行を逞うせる人物(エミリヤ、カロツチーに在る殿の如き)は亦輕侮

みまぐきかたちわれながら、うまし少女は愛されじ。  
神の御手につくられし、からずのいま多と、のはず。  
あやしきさまのま、にいて、われを、この世に生れけり。  
身の文ひく、脚ふへて、狗も影をば吠するなり。  
世にたとへなむものもなき、あはれ、造化の戯か。  
このさま故ま、顔故ま、申あしき人の愛を得ず、

もださむよりいidemむら、世におそろき悪も此、  
各はいとはどな方もて、おのかおもひを晴らすむ。  
是れリチャードが懸想せし美人に愛せられず、又王位に  
も昇る能はずして、天に動じ地を震す、遂に國王を殺害し  
て、手印を纂奪せんと欲する決心を起せしを叙せしものな  
り。沙翁がリチャード纂奪の動機を心理的に描き得しは、

リチャード

頼る妙とせし。讀者はリチャードの人物を眼前に彷彿  
たらしめ、為に同情を表れど、殺害の決心に至りて  
は恐怖の念を生ずべし。かゝる情の激動せる光景を  
リチャードが懸想せし美人に愛せられず、又王位に  
も昇る能はずして、天に動じ地を震す、遂に國王を殺害し  
て、手印を纂奪せんと欲する決心を起せしを叙せしものな  
り。沙翁がリチャード纂奪の動機を心理的に描き得しは、  
制裁も脱却し、之を超絶せる観向りて、  
人煙遠き寂寞の自由の天地に居るが如し。故にリチャ  
ードが我は唯我一人なり、他人の干渉を容れずと云ふま  
に至りては、自ら一種崇高の光景を想し、  
妖霊の化身と見做すにまで至らむ。  
精神的崇高の中、消極的崇高の感強きに過ぐれば、崇高  
の内容全体が消極的とあるべし。前條の劇中、リチャード三  
世が思案の態の如きは、妖霊に對する恐怖的崇高なる

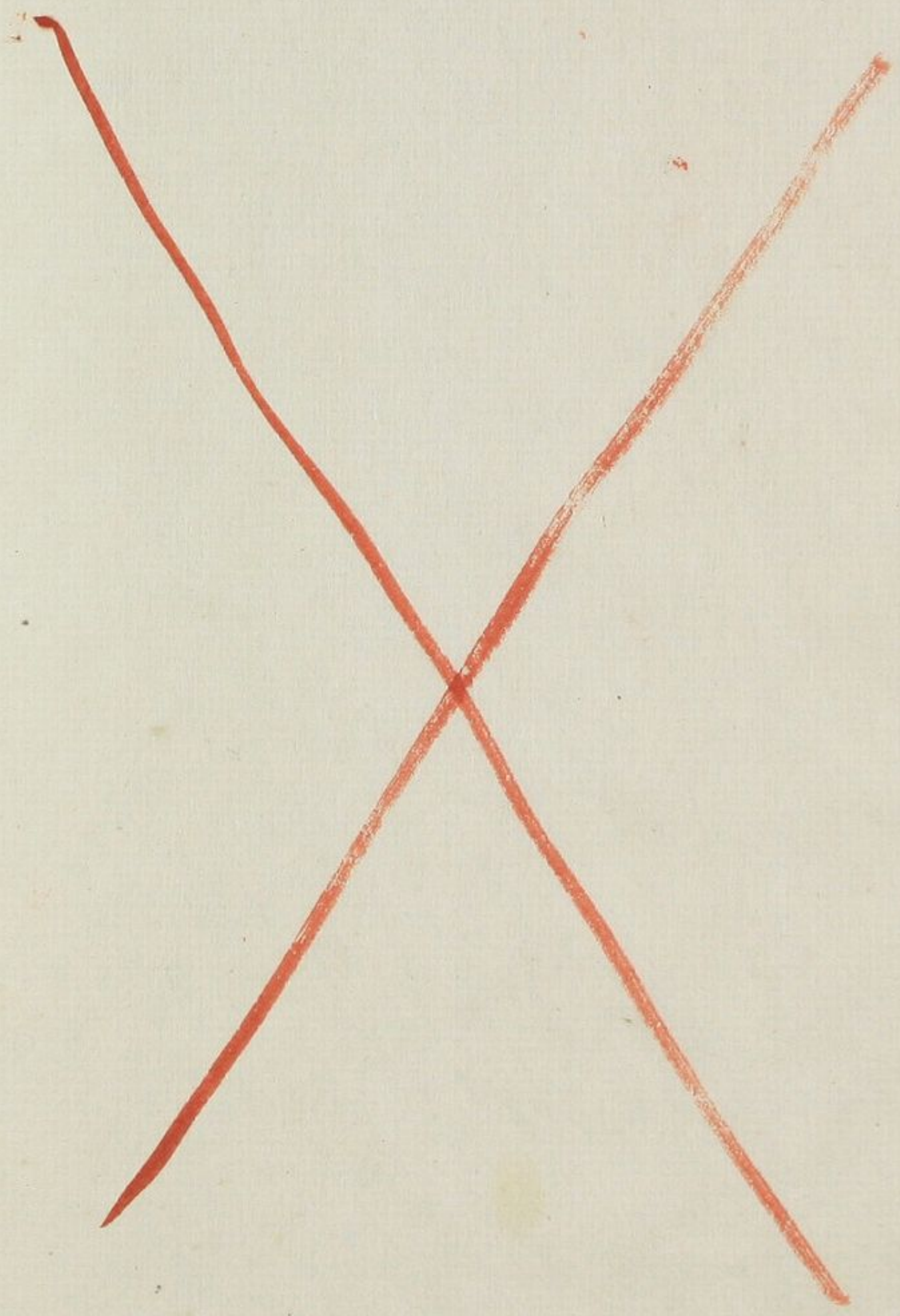
リチャード

尚ほ 高度を高むれば、悪魔に對する大恐慌となり、人意を測るべからざる怪物と云ふは、メフィストに見へたるメフィストの如きは、即ちメフィストは學者にして人格の上に崇高を備へて表現し、メフィストはメフィストの成功を妨害せしめしめる悪魔の表現あり。悪魔の表現せるメフィストを戯曲中の人物として立たしむるは、人の相貌を備へて内心に悪魔の性を有せしめざるべからざるを以て、ゲーテが「浮城物語」を揮て人物を構成し、乃ち「浮城物語」分子を加味して之を調和せしめ、試み多し。『天人の歌』に見へるメフィストに詔る辭に、  
天魔の中にも我は汝に如き滑稽者を尊む。  
とあるは即ち、ヘーゲルは美學上より論じて、悪魔は

戯曲 劇に必要なる役ふりといへり。ヘーゲルは、少しも積極的分子なき消極的の人物を不要とし、怨恨の餘り、怒を面に現はせる容貌は美に非ずとして、之を排斥せしむるは、合理的に説ふべし。『浮城物語』のヘーゲルの説は、唯一の面のみを見て、全通觀せざるなり。又物三昧を調和するは、看護婦を出すか如く、善人をして益善ならしむる為に、調和の方便に悪魔を出し多りとすれば、悪魔も亦積極的意義を有するに至らぬ。故に吾人はヘーゲルの説を全然却するものに非ずと雖も、其の隘隘なるを認めざるべし。近世の美術家は、悪魔の表現として、妖婦を描けど、古代の美術家は、可恐の崇高を顯して之を描けり。メテューサの面(妖婦の類)の如きは、是なり。

第二、婉美の類別

静穩の美たる崇高より區別して運動の美たる婉美はこ  
 こに標舉せらるべし。今夫れ静穩及び運動の概念たるや一  
 方に於ては、純乎なる觀念上の意義に於ては、他方に  
 於ては、一乃具體的の意義に用ひらる。其差別は、單に各自の  
 度合に存するが故に、崇高と婉美との間に明白なる関係は  
 有ること言ふ須ひず。而して静穩を以て原本的要素と爲した  
 る「崇高」の範圍に於ても、副次的に運動を以て原本的要素と  
 爲せる「婉美」の範圍に於ても、時に静穩の存在するを見るべし。  
 但し、この美的關係は、静穩と運動との間に存し、重要なる對立  
 なるが故に、此關係として搖動し、崇高の特色たる静穩の分  
 子が多く、婉美の範圍に移入し、婉美の特色たる運動が多く



崇高に**加**るは各**其**の範圍に於て矛盾を生じ特殊乃美の  
印象をその範圍中に混淆し遂に**其**の原本的特色を滅せし  
むることを有るべし。

かゝらざる限り**具體的**の物体に於ける兩者の範圍は全  
く平行すべきを以て**婉美**の分類は崇高を論せし時と趣  
同くし首に**其**乃外**近**的**内**的の兩形色を區別すべし前者  
は形式的に美を保有せる體形の中に伏在し依て體形一般  
乃**婉美**として表示さるべし後者は**内**的の崇高を全し特  
殊なる**精神**的意義を有し依て**風神**乃**婉美**に由りて察知す  
べき者あり若し夫れ前者と後者と移入する時即ち兩者  
乃聯結したる時は**雍雅**とある此れは**自然**的**婉美**と**精神**的  
**婉美**と乃融合として表示すべき者あり**雍雅**は固く**精神**

的**婉美**乃範圍に属すも**金**も本質上とて一は**精神**乃**自然**  
的の方面に根拠を有し所謂**自發**的なり**自**つや**自然**的**婉美**は  
**精神**的**婉美**と明かに反對し時立すべし**自**然**無**意識なる  
天然と見出るべし結局は主觀的**心靈**に属すとすべし  
今例を示さば**婉美**乃印象は階上乃**麦浪**と以てすべし**雍**  
雅**麋鹿**馬**猫**等乃**運動**を以てすべし

一 體形乃**婉美**

(1) **運動**する**體形**

**運動**する**體形**乃**婉美**は**婉美**乃現象中**運動**乃最大なる  
あり更し**現實**にいはば**動物**又ハ**生命**なき**天然**物が運  
動するも見て或る場合に起す**美感**あり二の種乃**婉美**を惹  
き起すべき境遇たるや或る**定量**乃**運動**を保有するを要す  
と**金**も**過**激なる**動搖**を忌む彼乃**暴風**陣**林木**乃**翠蓋**を**推折**

する如きは現象乃壯大を聯結したるものなりし了るの印象  
は崇高といふべく決して婉美に向らば然れども前も舉  
げたる如く軟風禾田を掠めて連続的波動を起すは誠と婉  
美と稱し更に比較的高度の者も以てせは適切なるべく  
形貌已に美なる動物の跳走するときの如き形貌は運動と  
諧合するを見れば例せば静に嘶き緩に走る馬の如き跳  
躍する羚羊の如き他は遊戯する動物皆然り也子記せし如  
く運動の婉美を於ては高尚なる心理的要素を混有す  
是は雍雅の特性を付與し且つ風神の婉美の先形前段とし  
て見るべきものなり人の婉美の區域は問はずして知るべ  
きなり既に人的といふ即ち天然とて高尚なる意義を有し  
重く男女異性の種々の美と聯結するなり今夫れ崇高が力

以て  
言は  
ざる  
可  
也

え

量及壯大の現象と聯結して威嚴と云ふ男子の形体に適應  
する如く天然の婉美は形容の柔和と温靡并に運動の諧和整  
齊と云ふ婦女の形体に固有なるものなり是乃未だ成熟の  
の年齢に達せず男子の特徴たる力量も明かに發現せずし  
て両性の差別顯著ならざる童子と稱況とに在りては猶ほ  
婉美の存するを認むべし其最速なる男子を見るべきなり  
如く截利なる能はず但童子アーサー若くは樺兒エニア  
ルドの名を聞く時方しては其の脆弱孤立に對して慈憫  
の情を惹起すべし此れは情緒の内包的印象にして昇れは  
崇高の明確なる悲曲的結果ともなるものなり是は樺  
兒に向しては両性の特質的差異乃明に嚴現するは其遊戯  
に於て徴すべし幼女は主婦の氣取を或は訪問主をなせ



この童子は家父擬することをあきらめ却て依盜賊士探險  
家及び其他類似のこころを爲して喜ぶに何れすや。かくして  
兩者の間、家族的感情の遊戯娛樂と共に嚴達するのこころ  
して童子も今は生育せざるし力量も嚴動し來り怯懦ある  
少女に對して自己の威嚴を感じ因て其の保護者たるに代  
して先子は物質上未熟なる為、崇高を欠きたるしに代  
へて今は素朴なる滑稽的印象を起さしむるに至る。而して  
女子に於ては婉美の印象を起さる。且つ夫れ自然の婉美  
の本体を求むれば運動する形體に在り。之と併存する者は  
充實調諧纖美柔軟婀娜等婉美に附屬する特性あり。就中運  
動の波狀的起伏を以て最とす。而して是等現實的に考察さ  
れし要素を更に進んで理想的に考察するべきの論点自然

的婉美の初段ある體体と第二段ある靜穩の體形に入る  
あり。

(四) 靜穩の體形

靜穩の體形は美は美なる體形の外線が整齊を成しつゝ互  
に離合して流走するに在り。かくの如き流走は觀念上  
の運動が波狀線形式を以て表現せらるゝとして考察す  
べきなり。眼球は波と波とを移動してこの波動を追求して止  
まらずに觀察者の眼球が運動せらるゝに因りて知覺せる運動を  
直覺に依りて體形の上に轉移し來る。この種に婉美は独り  
人間界に限るに非らず客觀の自然界に於て又然りとす。  
獸類の群を去るはすでに整齊の姿勢を帯び明に靜穩  
の狀態に在るものあり。彼れは長閑に群れ遊ぶ鹿の如きは整

齊的にして、之乃柔和、可憐、小心なる性質と連結するときは、  
誠、婉美の感を興ふるあり。又、猛獸の如き、普通には恐るべ  
き印象を興ふるに拍はらず、時に婉美の状態を現はす事あり。  
例せば、幼虎兩三、或ハ游戲する向、或は乳を吸ふ向、其  
群中に横臥する母虎の如き、實に柔和なる母らしき情、其  
表現として、婉美の印象も人々興へ、其本來の血腥き記憶を  
して一時消却せしむるに足る。而して二に、天然界は運動  
體形の婉美の範圍に於ける如く、靜穩状態に於て又同様の  
印象も現出す。かゝる織美なる波状線は、巍峩たる山脈の起伏  
の中、何らせずして、林木の整齊の集合に向、即ち解麗多様  
なる葉の色を合せて、草花樹蓋の中、又花葉位置の間に見る  
る線乃振動の美は、明に婉美の印象を興へ、觀る者をして、其

た

の特殊の感情を移し、直にまた雍雅の印象を得せしむ。雍  
雅は常に體形の婉美なる運動を興へ、中には向るあり、或は  
亦體形が婉美なる靜穩を興へ、中には向るあり。然し、この  
の両方面が相並んで併存するときは、其の形式的關係に於て  
對稱も生ず。對稱中には存する韻律の美は、一般に尚ほ運動の  
美として、婉美の本質を顯はす。即ち運動體形の婉美は、整齊  
的運動の存在、或は顯はし、靜穩體形の婉美は、線の流走を顯  
はす。今や婉美の外延的現象を述べ終り、第三段に進む。  
婉美の内包的現象に移らんとす。是は精神的崇高の分類に  
依り、精神的婉美と稱すべき者あり。

二、精神の婉美  
精神の婉美は、一般に婉美の形態とあり、其現はれたる精神

新教

三下

現象なり。然れども精神の種々の方面に區別せられ、階段を  
成すが故に、精神の婉美も亦之に従て區別せられ、其最も

初段に属する者も、**神の婉美**と云ふ。

力の崇高と全しく**神**の形或は現象の空間性と時間性と  
を劃し、**神**の共通するは、心靈上の運動なり。抑も

風神心内の内部理性に關係をも有し、始めて現象と云ふに在る  
ものなり。この内性は實に心内の理性**其の者**にして、**具保有**

者として生命も有し、機官も備ふる吾人の身体に關係したる  
ときは、**靈魂**として察知すべきものなり。之に因て**風神の婉**

美は靈魂の活動性として現はる。而してこの靈魂の活動性  
は種々の等差に在りて、**獨り人類の主觀的心靈の區域に限**

らば、動物も又た靈魂を有する故を以て、ひろく**客觀世界に**

神敬

神敬

神敬

も属するものと此の如き**靈魂**の活動性は、両方面を具ふるが  
故に明かに亦た**天然の婉美**と**精神的婉美**とも區別せしこ  
とを要す。**謂ふ精神的は特殊の意義をも有し、主觀的心靈を有**  
する者にして、**單に**、**ふに**、**全し**きを忘るべからず。

(1) **天然の風神の婉美**

天然の風神の婉美は、**体形的婉美**と**精神的婉美**と移る  
過渡の状态として見るべく、**天然**の力の崇高と對立する者  
にして、**已に**、**靡雅**として説明せしもの**是れ**と云ふ。通俗に**靡雅**

といへば、**婉美**ある運動体形を指せども、**實は**、**静穩**体形の**外**

圍をなせる**曲線**が、**整齊**ある**流走**をなするを見て、之を**精神**

上に描き、**觀念的**の運動と云ふは、**正に**、**靡雅**と云ふ。されば、**雅**  
**は**、**体形**の**天然**の**婉美**と**精神**的**婉美**との**境界線**上に立ち、

神敬

多少兩者に偏倚する所は、因て雍雅は意識なき植物礦物  
より何れも動物より限らず、知るべし、而して天然の現象  
よまざる雍雅は、こととするは、全人か外界に對して起す感  
動を以て無感覺なる外界を類推するに因るなり。今夫れ光  
景を譬諭的に叙説するは、詩的韻章に於て自然の事物  
を形容する際、最必要あり。故に雷霆の暴怒、風雨の狂  
悪といふと同じく、風物を清爽といふ、野色をほふむといひ、  
月光を悲しげふといふ、いひ得るなり。その結果をして崇高  
ならしむるには、精神的力量を要し、婉美ならしむるには、柔  
和にして心魂を搖盪せしむる運動を待つなり。若し夫れ心  
靈の活動性を以て主觀的心靈が感動する中心として考察  
する時は、其の婉美は、すでに自然的風神の婉美に非ざして、

精神の風神の婉美とふるなり。

精神の風神の婉美

精神の風神の婉美は、美の心の表現なり。ここに心は  
具體的意義を有し、精神乃受動的方面をいふべく、從つて  
精神の風神の婉美といふも、狭義の者なりとす。美なる  
心は意識と連結するも、意識其の物に非ず。心自ら其  
のその美を認知せず、たゞ現象中の美として意識と連  
結するに比して、如き意義に於て、イフイゲテ、テラス  
テモ、イモイゲン等の婉美なる所以、美なる心が婉美と  
して發現するに似て、是等は皆女性乃心として、溫柔な  
る感情も尊貴なる天性、純潔なる情操、無垢なる胸懷の中に  
伏在し、常に体形の静穩と運動とに關するに、此ふらば、又

意識の形式たる言辭の中にも、婉美として現はるは、**女子**なり。男子の特性は、**猛悪**ならずといへば、**女性**に見るが如く、**柔和**の分子なき**為**に、**美**なる心を有するに在るは、**見る**が如き、遂に**美**をなすを得ず。唯だ男子の未だ**成熟**せざる少年の時期に在るとは、**力量**、**威嚴**等未だ極致の**精神**を達せず、**形**も多少婦女と近似する。可なり、**精神的**婉美の**風神**は、**内部**の矛盾を以て**表**現す。然し、**男子**が**到底**離脱し得ざる**競争**的生活は、**少年**をして**精神**上に**天然**の**美感**を消却せしめ、**其**の**生活**競争の準備として**集**の保つ所の**経験**なるものは、**少年**の**精神**乃**美**に欠くべからざる**幻想**を破壊し去るのみならず、**其**の**筋肉**乃**硬**固なるが如く、**感覺**を牢固ならしめ、**力量**及び**意志**を生ずる現象は、**その**性情に影響を及ぼして

ここに**婦女**が**善良**と**尊貴**とを併せて有するは、**其**の**天性**として多言を要せん。男子は**経験**と**意志**とに在りて、**確固**たる**精神**を有するものなるが如く、**若し**婦女として、**其**の**柔和**なる天性を失ひたるときは、殆んど男子に近似するに至るを見るべし。然し**本来**の**婦女的**特性は、**能く**か**か**の**離脱**すべく、**因**に**美**なる心を顕著ならしめ、**精神的**婉美の**感情**を失はざらしむるあり。之を要するに、**風神**に於ける**節調**の**精神的**婉美は、**精神**の活動する度合に在りて定まるものなり。此は**精神的**崇高の範圍に現出せし**悲劇**の形態に對して、**喜劇**の形態を負ふ**悲劇**の形態が**精神的**崇高の諸形態中の**最高**に在りしが如く、**喜劇**の**状態**は**精神的**婉美の諸形態中の**最高**に在り。アリストテレス以後、**悲劇**の**迹**作は、**哀憫**と**恐懼**

とを喚起し、同情の人をして暗涙を激かすむる者とあし喜劇的述作は他を快活ならしめ、<sup>曲</sup>然る大笑を發せしむる者と定のちれたる兩者の比較は、戲典論の章中に具す。然れども悲劇的大團圓が美的に進行するとき、その主人公の特質煩悶眩暈を以て錯過の起るべき境遇としたるに反して、喜劇的大團圓は觀者か自己の特質を以て是認して美的とすべし。而して全く錯過なき煩悶は悲劇的たりし恐怖の感何る為めにむしり醜惡を歸し、平板なる尋常の瑣事は喜劇的なるも亦均しく醜惡を流るべき事、同理を以て推知すべし。

崇高の論に於て述べて同一く婉美を表示する特性の伸張は、時に限界超越して時異なる状態となり、<sup>曲</sup>為に醜惡を

變ずることあり又量の超過は崇高を以て消極的形態ならしめ、恐るべく驚くべき妖怪の者に變せしめしと同じく、婉美の區域に於ては消極的形態を以て至るべき也。但し其方法は反對する。即ち小なる者は瑣細とす、大なる者は軟あるものは衰朽とす、柔あるものは纖輕とす、雅あるものは妖嬌とす、活あるものは鬱幽とす、如く沈言すれば本来の感情、過激とす、同情を喚起するに至らざる却て其の反對のものを生じ、婉美に代るに不快乖性の印象を以てし、客觀的に醜惡とならしむ。其の此に至らしむる主要の原因は、婉美に就いて無條件に豫期すべき本能的要素を以て反看するに至りし、推究とあし、因る偶然の印象を破壊し、觀者をして自失せしむるに在りしとす。今夫れ不任

意と朴素とは婉美の印象を起せしむ者にして之を欠けば  
反對性の感も衰せしむるあり。トイゼンの假装せし朴  
素と活動せざる雍雅とは實に其好適例なり。之を要するに  
婉美が消極的形態を取るべき。婉嬌は更に輕浮とあり可笑  
的は曖昧とあり了すべし。

以上甲乙兩節に於て美の抽象的概念を論定し之を兩方  
面として對立する。崇高婉美の兩形式を考察せし。而して其  
結論として凡百の現象が美とあるべき。風神は崇高婉美  
の範に於て發現すべし。といふたげあり。然れども是れは  
通常標準にとり現象を以て直ちに美の印象とあるが故に  
然らざらばして若し具体的現状を直観するときは其の説  
の秘密を知らざるを領得すべし。而して具体的現象の考察を  
精確

以下  
又以下

あるときは通常標準を交換する必要あり。蓋し具体的美は  
抽象的美の外に他の分子が入りたればなり。崇高と婉美と  
は前者其形式の差異を以て抽象的美の顯現せしむるあり  
といひしが今や個々の現象を考察するに際して兩者の合一  
は特質的美即ち理想的美とあるべき。具体的性質を有する  
ことを知らざるべからず。

### 第三 理想と現實

理想の概念たるや美學全体の中より最も困難にして、  
且つ最も重要なるものあり。其困難なるは偏倚せる寫象に  
聯結せるが故にして又其重要なるは美學が理想的直覺の  
科學たるが故にして蓋し理想と現實とは便宜上正反對  
峙立するものにして辨明する難るあり。若し現實性と眞

以下

おぼろげ

と同一ありと思へば大なる謬りあり此の謬見も持する人  
よき見れば架空の想像にして到底實現すべからざる現象  
あるが如し此の如き偏見が誤解を生ずるを明かするに  
これにして現實性と實在性を混同したるに起因するを知る  
べきし。現實は唯だ有るはあらぬて小固有の本旨を實現  
するときは限り、真正の實在を有すといふこと、之の及んで  
現實に属する偶発的及び非本質的のものは其本旨に關係  
なきを以て、真正の實在に属せずたに、偽現すといふべきもの  
此が、迷へるは、實在は現實の内なる真にして理想と  
同一視すべき者たるを知すべし。他は免に角便宜的辨明  
は上言の正確な認識として、却て矛盾に陥りし者なり。例  
せば虚禮を伴ふの現實的の婚儀に對して、真の婚儀ある

76  
者も尋ぬるに、觀念が完全なる方法にて、實現したる婚  
儀に外あらざるは、非實在、非真實なる者は理想的ならん  
して、現實あるを知らずし、之を會得せしには、普通世に知ら  
れたる一警語を、丹田に銘するを要す。即ち、世界を一つとして  
完全なるものなしといふこととして、更に、不正尚非真實  
の者は理想の方面に於て、現實の方面に發見するべし。  
といふことを推知すべし。  
= 理想は現實の基礎とあるものにして、理想が實現するに  
程度不完全あるときは、現象とあるものあり。故に理想は直  
觀の具體的形式に於ける觀念なりといふべし。此には特に  
美といふ形容を付するを要せず。何と云ふは、美の觀  
念は認識、眞の觀念、欲求、善の觀念の範囲に属せず。たゞ純粹



直観の範圍に存在すること自ら明かさればあり。かくして理想を以て直観の具体的形式に於ける觀念とふし之を領取する方法は三種あり別あるを見る。それは天然に對する主観的心靈の地位に關係して無る者。卷首に辨じたり。即ち現實の真正内容たる觀念が(一)には客觀的内界たる天然の内を含有せらる(二)には外界に對立する主觀的心靈の中に含有せらる(三)は兩者の中を取りたる者として具體的實在に固有たる天然の方面として主觀的心靈に含有せらるることあること。是れより之を理想の第一形式は單に自然的理想と稱すべく、第二形式は其の本体を言へば創造的幻想の範圍に屬するものにして藝術的理想と稱すべく、第三形式は自然と精神とが同一方法を以て對峙する者にして

人文的理想と稱すべき者あり。

今理想の三種を分ち論せんとするに先ず之を何れも共通する本質に就いて一言せむを要す。理想と現實との關係を誤りたるが如く理想の内容に就いて甚しき意見をもたしむる凡て反對性をもたしむるを絶對的に平均せしめて

茲に其の共通の本質を置かむる。其例は前に示せる如く

蓋し其區分たるや混一して區別なく、体形精神の兩關係に於て均しく其の形式を奇怪矛盾の者とふしり。理想がかく誤解せらるるや、現實はたゞ假有の者とあり、眞有せらるる者とあり。今夫れ理想は確に反對の特性を均一せむとする要素を有し、しかも要素を有するに因りて眞

47

は美學家も  
術家も共に  
ことにして

観



い主観的心靈を内とすれば、客観的の、天然は外あり。即ち所謂外界として、その表示する現実は一概に直観の對象たるべき天然物象あり。ここに直観は、重に受動的の者もいふ。然れども、自由の内包的要素を基礎とするが故に、時に活動に上昇し、理想は為に断片的に表はれて、林形の不完全なる現実に到達することあり。詳言すれば、或は醜惡の表現をふし、或は現実の純粹なる形像として、天然理想的の美を表現するあり。今この形像を以て、現実を判定する確固たる尺度とふし、美的觀察下に何らゆる形像の直観も、其たる尺度を以て測らるべく、かゝる美を箇体現像をも相對上、比較的醜と所定するを得る。然れども、現實は雑多なる諸現象の系統中に何とて種々に體制すべき者既に

外ありたるが故に、天然的理想は、即ち天然の理想として、抽象的普遍性を有せず、個々の系統に依存し、其根柢を存する標本より、理想的直観の形像として、堅固なる形式を現はさるるべからず。かくして理想は、普遍性及び定性の者と逕庭あり、寧ろ独立して所定すべく、宜しく具体的体形と稱すべきものあり。今例を以て之を示さば、男性的理想とは、女性的理想と限らるるは、能く其直観的の形像を得べし。水と普通人同性の理想は、樹は、遂に之を求むべからず。單に哺乳動物といふ樹木といふ、其理想の直観的形像を尋めるとき、亦全に然れども、其所定さるるは、尋ねるに動物は、一頭の馬をいふ、樹木は、一株の常盤木といふ。即ち是也。而して觀念の直観的形像がかくの如く

具体的に表はさぬ、ときは、**考察**更に細微に入り、**類的觀**  
念より**科的觀念**に至り、**科的觀念**より**属的觀念**に下降すべ  
し。馬といふとき、如何なる種類をいふか、英國産競争用の者  
か、將た亞刺比亞産の者をいふか、常盤木といふとき、之を狭  
義にして、椈か、落葉松か、將た柵かといふ、之を心の理會す  
る時、即ち是なり。今夫れ多様なる**客觀世界**に對立する範  
圍に於て、**理想**は常々**現實**と固有なる**偶然**、**純化**の形像、**外**  
ならず、**自然**として**現實**は**標本**と撞着せざる限りに於て、個々  
**現象**の實在なる。  
(二) 前者と全く異りたる關係を以て、**現實**は更に**藝術的理**  
**想**に對立す。**藝術的直觀**は、**天然美**の**標本**と相関せず、**直觀**が  
**現實**より造り出し、**主體**に反射したる**精神上の内容**に關す。

50  
柳も**藝術上直觀**及び**表現の對象**として、の**自然美**は**到底**  
**排斥**すべからざるあり。之を**標本的美**とすれば、この**直觀**に  
對して**抽象的**となり、**常に虛無**となりたるべきなり。但し之  
を**填充**すべき者は**主觀的根柢**より**特殊**なる**形象**を造り得  
べきまでは、**現實**の**偶然**の**事象**の中に**潜伏**して出でず。今  
夫れ**形容枯槁**、**風貌粗野**なる**老婦**の如き、**鞭撻**の**餘嘶**、**声自**  
**悲**しき**羸馬**の如き、**野草**、**荒蕪**、**日已**に**暮**しき**牧場**の如き、  
① **卑湿沮洳**なる**沃野**の**廢地**の如き、**將**た**又**た**淫霖**、**終日**、**暗澹**  
として**霽閑**せざる**天色**の如き、**自然**の**美的物象**とせず  
能はざる**現實的現象**なり。然れども、是れ個々に**觀察**して、然  
るものに於て、**其集合**は**高尚**なる**藝術的美**として、**絶好**なる  
**大圖畫**に**動機**を与ふる者あり。即ち**年老**たる**物乞**の**賤**の

女齒牙脱落したる口邊に破笛を横へ蘆葦岸ヲ埋むる沼地の  
荒蕪牧場の中に立ち其傍には古びたる荷車あり  
車前骨立せる老馬は枯残せる草條を食みつゝ天色灰の如  
く暗澹として物象を掩蔽する如きに至りては確に一の圖  
画として著るしき藝術の神韻を發揮するに足る者あり天  
然現象に就て同様の事あるは輕々看過すべきにあらず彼  
の暗澹たる風物の反映の如きは其特たる者として藝術  
的的美を表現するに足るべく又觀者として畫量の物悲げ  
あるを直觀せしむる乞食盜賊の如きは天然的理想に正反對ある者  
ありと猶ほ時に前者の如く是れ於て天然美と藝術美と  
か本質上異りたる概念たることは独り事實上のみならず  
根底に於て亦然るを知るなり之に由て藝術家と世俗とが

天然と作品とを全く異りたる觀察點の下に直觀せむとす  
るは理を以て知り得たり即ち藝術家は天然を以て藝術的  
美と同様に觀察し世俗は作品を以て天然美と對立して觀  
察せしむる兩者はかく異れども其表面的なることは相  
似たりと謂ふべし

(三) 人文史的理想の概念は天然的理想と藝術的理想との  
間に存在せる過渡者ありに天然を以て主觀と對立せ  
る外界とありずとふし具體的の自我として主觀的心靈に固  
有する實在の天然の方面と合せり仍て主觀的心靈の史的  
發展は單独なる個人の歴史に非ず人類諸種の歴史の複合  
結果にして人性の歴史といふべき者あるを知るべし二  
見解に於て主觀的心靈と天然との反對は廢滅に歸すべ

主観の實在は人類及人性の實在にして、天然及び精神の史的發達を通じて謂ひ得べし。其天然常に精神を支配す。此ふらば精神又常に天然を支配す。其相関するが如し。社會の組織が族系、氣候、地勢等の影響を受くるが如し。然れども此の場合には直観も自ら特殊なる体形と色彩をも有し、理想は人類の人文史的發達の内容として必ずこの特殊性と實在性とを併有す。但し是は天然的理想及び藝術的理想の如き絶対的の者に非ず、又抽象的の者に非ず。此の發達は作用と支配する者にして、實は同様の表現あり。この關係と其の變易とは人文史的共合發達の全範圍に影響を及ぼす者にして、社會的生活、國家的組織、其他風俗、宗教、併して藝術的直観に何々特殊なる印象を興ふるものあり、而して

又發達の連續的流進の中に起るが故に、印象せしめて交代無限ふらしむ。今藝術的理想の人文史的發達の中に、本質上の區別及び連續の存在の豫知すべきを注意して、爰に例を示さむ。古代東洋民族の直観体形は本質上建築的にして希臘民族は塑像的、近代歐洲は繪画的性質を有するあり、而して第一期に於ては建築、第二期に於て塑像、第三期に於て繪畫を其主要なる藝術として練習せしは、いふまでもなく更に進んで東洋時代に於ては他の塑像も繪画もすべて建築的風致を帯び、希臘時代に於ては他の建築も繪画も塑像的風致を帯び、耶蘇時代に於ては他の建築も塑像も繪畫的風致を帯びたる如く、すべて緒余の藝術もその特性を明示するを

見らるし。

準備の  
ここに後章に必要なる議論を終りたれば、吾人は更に一歩を進めて、理想と現実との関係の第一形式たる天然美の考察に移らば可し。

第二編 美の特殊の観念

第一節 天然美性

直観の対象及内容としての天然美

美的見解を以て外界を考察せしむには、先づ天然美性と天然美とを區別せざるべからず。前者は天然美の結果の由りて来る可き普遍的要素を有するものにして、後者は美的に美なる事物の全体を包含するものあり。吾人が天然美を天然美として判断する事を得んば、保有する養なる性質の根柢に就て意識せざるべからず。而して此等の根柢は上述の一般形式的要素に於て存するが故に、第一着に此等形式的要素の本質を研究するを要す。次に、吾人は此等形式的要素に就て知れりとするも、吾人は天然美某もの考察に着手するに先づ、尙ほ

特殊なる生活状態に關する天然を考察せざるべからず。  
蓋し自然界は發達と生活範圍とに關して無数の階段より  
成るものにして、其發達の程度に従て機械的、化學的、  
及有機的、形成の三部に分る。所謂礦物、植物、動物の三  
界是なり。而して天然の此方面に於ける考察は彼の純粹  
形式的要素に於るが如く、光、色及濃淡等此養學的旨趣  
を研究するものにあらずして、結晶形式の如き、植物生  
長の如き、動物形態の如き即ち天然物の質料的性質  
に關し、一言以て之を蔽へば直觀に於ける彼等の美學的  
關係を研究するものあり。【註十参照】吾人は天然に關する  
考察を此等形式的及質料的の兩方面に分ち、先づ形式  
的方面より始め次に質料的考察に進まんとす。

第一章 天然養性の形式的要素

吾人が直觀の直接對象は現實某物にあらざして、唯現象に過ぎざるが故に吾人が天然美性に關する問題を論ずるに方りては、必ず現實が由りて以て吾人の直觀に現象として現れる、形式に立戻りて論ぜざるを得ざるなり。而して吾人が前記論じざるが如く、此の現象の形式ふる者は空間と時間とに外らざるが故に、天然養性の形式的要素も亦此二方面より研究せらるべきあり。

第一節 空間的、天然養性の要素

空間的現象が吾人の直觀に現はる、は光の媒介に由る。然れども主として空間的現象の要素を形成せるものは、光にあるを以て、事ある其産物なる色及び形ふりとす。由



來光 **は** **等** 空間的現象の由て來るべき神秘的源泉にして、  
到底直觀の明達し得ざる所あり。蓋し純粹なる絶對的  
光明は絶對的暗黒と同じく吾人の視力の及ぶざる所あり。  
はより。而して第一に**光源**より生ずるものは色にして  
次に色を抽象すれば**形**を生ず。故に空間的天然美性は  
色の美性或は**形**の美性として現はる、ふり。今吾人が如し  
此區別をふす所以は他に非ず、一切の現象は色と**形**の二  
要素を含むと雖も必しも兩形式に於て美なるを要せざ  
時に色に於て、時に**形**に於て美なるものあるを示すに  
過ぎざればより。されば**光線**の第一**産物**なる色は空間的  
現象一般に於けると全く、殊に天然美なる現象に於ける  
第一**形式**的要素なり。

然れども色を以て光の第一**産物**とすれば、吾人は同時  
に**光**を見るをも考察せざる所からず。然れども純粹なる光  
は一般知覺の達せざる所あり。故に吾人の研究は**変** **形**  
的**光**にして、即ち色の光明の度なり。今夫れ**光**は必ず色を  
有し、直射光線にても或は反射光線にても**高**は吾人の眼  
に映ずるものは、必ず多少の黄色を帯ぶるものにして  
黄色の純白色に近づくに従て吾人の眼は眩せられ、視  
力を失ふものあり。假令は正午時に於ける太陽光線の如  
き、或は電氣光線(瓦斯光線に比して)の如き皆此理を示す  
ものなり。

第一 光

空間的現象の源泉なる「光」は三様の**形態**を有するなり。

第一は光身者にして直観の直接対象多る者。次は結果にして一般光明の原因多る者。最後に特殊なる色及び形状に由て現はる、物体個性の原因多る者。即ち是なり。第一の見解よりいふ者は、日の大地に於ける光の本体にして、太陽の如き、月の如き星の如き是なり。第二の見解は地上に於ける元素的な光にして、云ふものにして、十二宮光の如き、電光及び其他の一部電性にして一部燐性なる光の如き是なり。第三は即ち純粹なる物質的の光にして、註十一参照。燐の如き、火花の如き、燐の如き、特殊の形状に於ける火木れあり。而して此等の現象に於て光線は常に媒介物多るに止らずして直接的なる対象として價值を有せるが故に、光身者の考察は後章具體

的天然美を論ずるの章に譲り、ホ、には先づ純粹なる光の第一産物多る色に就て考察せんとす。具體的天然美の章にては光は火なる名称を取つて地、水及び空氣と共に所謂現實世界の四元素と稱せらるる。

第二 色

色の一語は種々の意味を有す。第一純粹なる質料的の意味は解すれば、画家の所謂較色板を成せる一部植物性にして一部礦物性なる色素にして、即ち繪具なり。然れども意味に於ける色は吾人ホ、論をべきものならず。又色は主觀的及客觀的の意味を有して、吾人は色の現象(物理學的的色彩)と色の感覺(生理學的的色彩)の區別を成すと雖も、是れ同一物を二方面より考察し多るもの

に外ならず。而して美學的の意義より言へば、此區別は  
毫も問ふ所に向らず。蓋し吾人の考察せんと欲する所の  
ものは、寧に生理學的の意義のみならず、寧ろ心理學的意  
義に於ける色の感覺にして、此感覺の根源とせらるる  
客觀的現象の如何は、問ふ所にあらずればなり。故に光  
色及び形の直觀に於る機關として、吾人の眼は如何なる  
方法に由りて現象を感覺と結合し、視神を通過して如何に  
之を腦髓へ傳へ、遂に之を意識に傳ふるかの問題に至りて  
は、措て問はざるあり。蓋し此一切官能は色の美學的研  
究に於て、無條件的に豫定するべきものなればなり。又  
彼の主觀の上に不同の結果を生ずる原因なる各色の  
性的差異の如きも、亦然り。されば吾人の考察せんと欲す

るものは、此等研究の美學上を於ける結果、即ち色彩の記  
號的旨趣に關する問題にして、兼ねて調和的關係に向り。

### 第十三章 照

有機的体制を有する色の美學的考察をおこなふ際して、吾  
人はゲーテの所謂「始原現象」を想起せざるを得ず。七色光  
線結合して白色光線を成してニュートンの説に對して、ゲ  
ーテは主張をなす。純粹光線に比較すれば、色は一種の陰  
影の外ならず、故に、黄色は空氣より暗くされ、多  
る白光にして、青色は暗黒が空氣より明くされ、多  
る暗黒と謂ふべきあり。ゲーテの意見は正當なり。何  
れれば吾人が輕氣球に乗じて空氣中を上昇するに従ふ  
と、太陽面の益は白色を見、天空の益は暗黒を呈するは事



じ、終、黄の正反對ある紫に至りて光明の度は其最小  
達し、橙黄の正反對ある青に至りて温暖の度は其最小  
達するあり。故に黄は橙黄に比して一層明あるも一層寒  
ふるが如く、紫は青に比して一層暗あるも一層温あり。  
色の美学的本旨は、關して重要なる結果は次の如し。即  
ち色の中にある光、温兩性の度は、ゲイラ及びシヨペンハ  
ウキルの唱ふるが如く同一のものに非ざる。互に少しづ  
異あるものあること。一の重要なる美学的條件ふ  
り。色  
色の光温兩性の間並に暗・寒兩性の間も本質的差別  
の存するおとは明なる事實あり。然れども此等兩性の度  
を支配する嚴正なる合法性の存すること。並に色彩の温

度、光度、は相異して而かも相類似する漸進的階級の  
指示すべきものなるおとは、従来の色彩理論及び画家の理  
論的見解の全く想到せしむ所ありき。而かも尚ほ實際唯  
度の差異は於て、一級色彩の成立は説明せらるべきなり。  
吾人は上來の說より起る色の記號的本旨の實際結果に  
進むに先立ち、赤・緑の對色に就て一言を費さざるべからず。  
抑も赤と緑とは光度と温度との間に或る調和を有する  
ものなり。蓋し他の一切の對色は、光性並に温性は於て  
反對を有するものにして、依て青の橙黄に對し、紫の  
黄に對するが如きは、僅に一層暗性あるのみならず、又一層  
寒性あり。然るに獨り特殊の暗階に屬する赤の、特種の  
明階に屬する緑に對する關係は、緑の赤より寒ふるは

と、子、ぬ、た

色の表號

赤の緑より暖ふるが如し。赤れよりして養學上頗る重要  
ある結果の生じ来るを見る。即ち赤緑の對色は有機的  
制をふせる色彩界に於る除外例。光性及温性の兩度  
は關して二色は互に相補充し。赤れよりして色彩界に  
於ける主宰者なるものあり。  
色の性的關係に就ては以上の説を以て満足せざる可  
らず。然れども上述の所は色の記號的。旨即ち養的感  
覺に於ける特殊の關係及び吾人が所謂「色彩の調和」を解  
せんが爲め最も注意すべき所。而して此原理に  
關せざる他の一切色彩上の議論の如きは、美學上毫も價値  
をも有せざるものあり。  
色・表號論は養的感覺に關して單色或は單なる單一

の補元的對色に就て研究するものにして、色彩調和論は色の

表號的の旨を基礎として、美的感覺に於ける關係を研究す

るものあり。されば吾人は先づ色の表號より考察を始む

べきあり。表號とは何ぞや、一の關係を現はすをホとあり

ホの意味より言へば、常に直觀の範圍に於てのみならず、

認識及知覺(後)は宗教的表號の形に於ての範圍に於て

價値を有するものあり。然れども吾人が今此處に研究せ

欲する所のものは直觀的表號。即ち美的關係に於ける色

の關係にあり。ホの關係を最も適當に表はすは調和なる一

語として、二重の意味を有す。色の調和の調和是なり

吾人が嚴格に快活なる溫柔なる色調或は心調

に就いて嚴格に快活といふ溫柔といふは

に就いて嚴格に快活といふ溫柔といふは

に就いて嚴格に快活といふ溫柔といふは

に就いて嚴格に快活といふ溫柔といふは

に就いて嚴格に快活といふ溫柔といふは

嚴格

語は適當なり。即ち色の調の合不合を言ふものあり。單色の調格は光度及温度を統一的结果に結合する特殊的關係に在り。而して光性と暗性の色の反對は快活と嚴格との感覺反對に相當し。温性と寒性の反對は感と不感との相當するあり。而して前反對と後反對と交錯關係するが故に種々の結合よりて四種の調を生ず。温性と快活との結合、(一) 温性と(二) 寒性と快活との結合、(三) 温性と快活との結合、(四) 寒性と嚴格との結合。此等は色調及心調の兩義に於て解せらるべきものあり。上は挙げるる四種の結合は相當する色を挙ぐれば、即ち (一) 橙黄、(二) 黄、(三) 紫、(四) 青にして、更に補色的見解より上述の四結合を考察するときは、(一) 異階に於ける類

似的性質の結合をなすものは(温性と結合、寒性と嚴格との結合、即ち橙黄と青との如き)異階に於ける異性質の結合(寒性と快活、温性と嚴格、即ち黄紫の對色)と全じく必ず正反對をなすものあり。吾人が單色を就て論ぜむして先づ對色を就て論ずる所以のものは實に條件に由るものあり。蓋し色調又は心調は之の對立する方面を見ざれば充分なる解せられざればなり。

(1) 白と黒 精密に言へば白と黒とは色をあらわす。何と云はれは此等は三稜鏡の色帯に現はれずして、唯當純粹なる光と純粹なる暗黒の代表として考へらるべきものあり。而も他の本來の色と結合して、明性度及暖性度に影響し、從て、調格を變更するものある

が故に、此等の影響を關して、少しく研究を要するものなり。

白と黒とは唯明性度の差のみを有し、暖性度の差を有せざるが故に、兩者は寒性より表層的、本質は無色なる特質を於て存するあり。彼の色彩的光華の中は生氣あり。

詩人の語は實によく這般の真理を發揮するものあり。白と黒とは有機的生活の滅却を代表するものにして、白色(白黒の混色)と悲色として用ひらるる。

冬季の休眠に於ては、天然も黒白の二色を呈するにあらずや。

前にも言へるが如く、白と黒とは光明の差を有するが故に、映治及嚴格の心情的差異を生ずること明あり。但し

暖性度の差より起るべきものあれば、感と不感との差異を生ぜず。然れども、白黒は寒性なるが故に、他の本来の色と混じて、其彩色は影響するときは、眞者をして純色に於けるよりも一層寒性的ならしむ。(薔薇紅色及暗赤色は純赤色より一層爽快とあり、黒の混ずるときは一層暗澹との差を有のみ。又、白黒は一般に有機的無生活を表はせ、其に眞性質上より次の如き對立を有す。即ち、黒は死寂の寂靜の如き、葬禮の沈靜の如き、絶對的無生活及無運動の感情を惹起すと雖も、白は純粹光明を代表し、爽快なる特質よりして、暗澹なる陰影界に向かずして、寧ろ天上の光明界に向ふ所の有機的無生活の感念を起さしむるものなり。



なり、故に人間界に於ける記號的、**韻致**として用ひらる、  
時大、白色は常に彼の詩的、**譯称**の所謂、**現世**に於て見る  
百うらざる特性、即ち十全なる**正直**、**精神**の純潔、**感情**  
の清淨等の如き性質を表はすものなり。されば神聖無垢  
なる**天使**の如き、**清淨**なる白衣を着けて、**凛然**するに  
向ふ也や。而して灰白色は黒白の混ざると異なるなき無差  
別的のものなるが故に、無生活の性質を有すると異し、  
**無執力**と**緩慢**冗長の特質を有するあり。**集**  
黒白は唯多光明の度を異にするのみあれども、**所謂**  
來の色彩に至りては、光度の差と、**温度**の差を有して、**真**  
結果の上に影響を有するものあり。吾人は先づ光明度の最大  
差を有する對色より研究を始めんとす。

(四) 黄と紫—黄は白に最も近接するが故に、  
**下**色彩として、黄と紫とは**対治**と**嚴格**との間を於ける最

大反對を表はすものあり。且つ**黄**と**黒**と最も近きを  
以て**黄**と**紫**は**橙**、**黄**と**青**、或は**赤**と**緑**の如き他の對色に比  
すれば、一層抽象的のものにして、**黄**は**精神**的意義に於  
ける最大の生活力を表し、**紫**は之を反して最深き**幽鬱**  
を表はすものあり。されば多少色彩上の趣味を有せる加  
持力教徒が黄と紫とを以て僧侶の眼色とあり、或は寺院の  
裝飾に用ひしが如き、**此**二色が抽象的性質を有するは出  
るものにして、更に一層質樸なる新教徒に至りては、一層  
抽象的なる**黒**、**白**の二色を用ひしが如き、**容易**に推知すべき  
のみ、**其他**黄色の特質は、**就**て**ゲ**、**テ**謂へる事あり。黄は

最も汚染され易き色にして、他は為に**真抽象**の性質を失ひ、**其結果**を破る可故は、黄色の汚穢なるもの尤不愉快及び恥辱の表露多りと。これを倫理的関係より見るも、吾人が病的胆汁性の顔色に於て見るが如き汚染的黄色は猜忌的、**悪意的**、**刻薄的**の性質を表するを知らり。紫は一敏に悲哀的、**隱退**及**幽鬱**の嚴格の印象を為すものなれども、**一多び**感動性なる赤色の加はるときは、人生の快樂を離れて、**猶**は全然これを斷念する能はざる底の**幽鬱**的にして、**而**も焦心的なる一種の嚴格を表するものあり。

(ハ) 橙黄と青、黄と紫とは光度に於ける兩極端なるが如く、橙黄と青とは温度に於ける兩極端なり。前二者の間よりて、**快活**と**嚴格**との對立する如く、**感**と**不感**との對立する如く、**後二者の間**に於ては、

立は又著しき結果なり。橙黄は最温性の色なり、然れども常に黄の強き影響を伴ひ受けて、(即ち諸の色彩中最も感動性なる赤に比して)多少の抽象的性質を有す。故に橙黄は壯嚴の感を與ふる一種の感動を惹起するものにして、廣大なる壯觀、或は尊嚴ある威靈の表露多るものあり。此れは又在るも此は即ち青なり。青は最寒性の色にして、從て純粹感及び心情靜穩の色あり。而も此靜穩は彼の黒色の表現する如**群**の靜穩の如き絶對的靜穩にあらざり。倫理的関係の上より云へば、青は本來の感動を容ざる情性、**質**冷淡なまでは至らざるも、これを表するも此にして、**誠實**、**謹慎**、**温順**、及**紫**の表は、**如き幽鬱的隱退**が而

67

らも其中に苦澁性を含まざる一種の熱望の表跡あり。而して無感動なるホとは自ら沈静なる思想と伴ふが故、青は又も智力的反省及び哲學的思想の表跡あり。

(二) 赤と緑 赤と緑とは光度及び温度の間に於ける差を互に平均補充するの特性を有するが故、總て色彩界に於ける主宰者なり。尚ほ位階の順序上より其關係を示さ

ざる、赤は原色として一層高位を有すべきが故、以て王とすべく、緑はこれに對して后と謂ふべきなり。蓋し

赤は其品位に於て、其勢力に於て、其養性に於て、其品位原色たる橙黄及紫に對して、一層高貴にして、一層養麗なるものあり。故に赤緑二種の記辨的養學的旨趣は全く

此特質より起るものあり。赤の第一は表は花ものは感動なり、勿論、橙黄も或る高度に於て「感動」を表は花と雖ども、抽象的性質の爲め妨げられて、未だ十分なる感

官的發動とならず、赤に於ては始めて有機的生活力及び少壯的熱血の搏動を見るあり。赤は即ち激昂せる熱情の

特殊の表跡あり、而るも此赤の高貴なる品位と矛盾せざる言を待たず、赤は堪へ難き憤怒、勇士の剛膽、及び

男女の戀愛等要する感情の激昂、心血熱熾より起る一切感動を表彰する色あり。元と絶對的反對の位地は立つ

ものは緑にして、平和及安靜の表跡として、吾人の眼は極めて平穩なる印象を帯びるものあり。緑は赤に比すれば感

動性を欠くと雖ども、其中は包含せる青の如く冷淡な

らも其中に苦澁性を含まざる一種の熱望の表跡あり。而して無感動なるホとは自ら沈静なる思想と伴ふが故、青は又も智力的反省及び哲學的思想の表跡あり。

らず、**黄の**影響を受けて、一種爽快な  
 感情を生ずるも此あり、**此特質**向るが為、赤と同じ  
 く、**其他の点**は、**赤の反対**あるも、拘らず、**赤の表**は  
 的**治氣の表**多るを得るあり、**而るも**其**治氣**は赤の表は  
 すが如き**男性的勢力的**のもの、**下**の如くして、**寧ろ**温柔なる  
 女性的**優美**なり、**實**は**自然**其**若**は**這般**の**消息**を示す  
 のとして、**今**又**此**冬期の**休眠**より**覺**めて**其**新生活を始め  
 とするや、**柔**き**緑**衣を着けて**其身**を飾るゝあらずや、**春**  
 時の**新緑**は於ける**此現象**が、**草**は**吾人**が**直觀**の**習慣**に依る  
 べきにあらずして、**一**の**客觀**的**旨趣**を有する**は**、**此**の如  
 き**特別**ある**養學的**条件に起因す、**即ち**其**初**の**太陽光線**の  
 直射の結果として**黄色**に見ゆる**新芽**の發生するや、**成長**

せる**緑葉**に於けるよりは、**一層**光明として**爽快**なる觀を呈  
 す、然れども**有機的**發展の**高度**に達して、**さ**きの**少壯**的  
**活氣**を失ふに及ばずや、**次第**に**薄暗**くなるのみならず、  
**益**に**青色**を帯び來り、**遂**に**秋**風景なる**蒼色**或は**灰白色**と  
 變じて**死滅**するに至るものなり、**されば**此の**少壯**的**新鮮**  
 を最もよく表はすも此は、**彼**の**温知**なる**而も**希望のなる  
**綠色**を措て**他**は**亦**むべからざるあり、**殊**  
 (ホ) **其他**の**三對色**に就いても**各特別**なる**印象**を有する  
 を見るべし、**先**づ**黄**と**青**の對色は、**か**の**赤**と**緑**の  
 間に於る**平均**補充的**關係**に**反對**して、**一方**は**光性**、**温性**、  
**他**方は**暗性**、**寒性**が**比較**的**高度**に於て**結合**するあり、  
**次**に**赤**と**黄**の對色は、**同**一**光度**と**反對**温度を有し、**赤**と**紫**

色の調和

對黃綠は同一温度と反射光度を有する者。その差異よりして又諸種表辨的關係の起るべきは必然の理なりとす。然れども吾人が前に列挙せる三種の原的對色に於けるが如く、確實ある特質を示す能はず。要するに、光度及び温度の間、於ける關係の充分なる説明は基となる表辨學の如きは、遂に空想に陥るを免れざればあり。

(二) 色彩調和論 色彩調和論は色の表辨的旨趣の基礎を有するものにして、色彩相互の間、於ける關係を研究し、其間に存する調が直觀する主觀の調に及ばず、養學的結果を推論するものあり。かくの如き關係は二色或は數色の間に起るものにして、其數に由りて所謂二調、三調、四調、六調、八調等の成立を見るあり。而して特に三調

以上を色彩調和と稱す。所謂調といひ調和と云ふ語は、音樂上より借用せし。これと反對に音色なる語が光學より音響學に移れるが如く、者にして、これ實に色彩と音響との間に或る類似性の存生するを示すものなれども、決して兩者の間は一貫せる並行的比例の存在を容るもの非ず。實際的色彩調和學は其範圍頗る廣汎なるものなれども、如此實際的方面の研究は吾人が今問ふ所にはあらず。吾人の研究せんとする所のものは寧ろ色彩調和學に於ける法則の由て來るべき原理は外ならず。而して所謂原理は調和ある概念の基礎を有するものにして、調和とは通常衆多に於ける統一として説明せらるるものなり。然れども異なる部分の統一と云へば、單に一個の全体を形成

するのみにあらずして、一方は於ては部分の全数、他方は於ては正當の順序を包含するが故に、調和の完全なる定義は次の如くあらざるべからず。即ち調和とは完全なる有機的体制を為せる全体を形成せる異分子間に於ける統一あり。ホレよりして第一原則起る曰く、直接或は間接に總ての色彩界を代表する色彩及色合は調和的關係を有せし。直接に起るものは三の純原色(黄赤青)の結合のみに限るも、間接には種々の方法より起るあり。例せば二調よりしては一の原色と其補色(例せば赤と緑)との結合に由るが如し。

上述の原則は唯だ色彩間に於ける調和的關係を論ずるに過ぎず。次は進んで此の如き調和的色彩關係が吾

人の養育的感覺の上に於ける關係を研究せざるべからず。吾人が是を單色の表露的旨趣に就て論ずるより自ら明かす如く、色彩間の特殊の關係に於ける特殊の色調は、これを直觀せる主觀の特殊なる具體的心調に相當すべきが故に、特殊の目的を達せんが為めは色彩を選擇するの場合には、此主觀的心調によりて制限さるゝあり。即ち主觀の心調爽快あらんか、(天然養育は藝術養育の範圍に於て)爽快なる心調に於てのみ同情を感ずるあり。若し又も嚴格なる心調あらんか、嚴格性を有する色調は順應するあり。若し又も心調と心調との間は如此一致の存するも此あらんか、主觀は到底失調を感じ従て不愉快を感じざるを得ざるあり。

例せば或る壯麗なる建築



第三、形、

前に論ぜしが如く形の直観を以て色彩直観の抽象的  
 起るべきならば、亦、に所謂色の語は、特種的意義の者  
 にあらずして、一般に種々なる光度として了解せらる  
 べし。故に色合及び陰影の差異の外は、黑白間を於け  
 る度を有する。或は吾人が渾然一色なる球を見て、  
 此を平坦と感ぜずして球体と感ずるは、球の各点が種々の  
 異なる度、於て光を受くるに由るなり。若し能ふべく  
 ば、或は人為的方法を用いて、球の各点より同一強度の  
 光線を吾人の眼に達せしめば、球は一の平面として見  
 ゆるあるべし。蓋し日月は、吾人を去るものと餘りに大  
 く感ずる。蓋し日月は、吾人を去るものと餘りに大  
 なるが故に、球面を於ける光度の差異は、殆んど消滅して  
 感ずる能はざればあり。

形の直観と色彩直観の抽象的なりと云ふ定義より見れば、  
 形を定むる第一の要素は、限界あり。蓋しこれによりて  
 現象が一般空間と区別して、一の形状を保てばあり。然れ  
 ども何謂「限界」とは、單に外的限界即ち輪廓を有するのみならず、  
 又内的限界即ち輪廓を由て統一せられたる部分の差異  
 として了解せらるべきあり。如く一の形状を以て  
 顯る、現象は、その儘では未だ直観の上の体的印象  
 と與ふるに至らず。單に平面的印象を有するのみ。亦  
 れが体的直観を呈せしむるは、更に直観要素の働を要す。遠  
 近視法及び塑像視法あり。遠近視法とは遠近に關し



て吾人が経験より来る觀念に歸するものにして、製圖術に於ける所謂短縮の法則の由て起る所以のものなり。而して塑像視法は次の如き事情より起るも此なり。即ち吾人は兩眼を有するが故に、一物体を就て二個の異なる映像を有すべき筈あり。而して左眼は右眼よりも物体の左側を多く視、之に反して右眼は右側を多く見るが故に、二個の映像は單に外的輪廓に於てのみならず、又内的限界即ち部分の範圍に於て互に結合するものあり。要するに直觀其物の取りては、一形状が客觀的に存在するも、或單に仮象即ち觀念的限界として存するも同様あり。此は凡て範圍に於ては固有物体が直觀の上に形成するも此は凡て唯だ仮象としての現象たるが故に上來辨明せる輪廓に

形状、遠近、平面性、形体性等の如き概念は唯假象の旨趣を有するあり。されば此制限の下に在りてのみ此等は物体の形式と謂はるものあり。色の考察に於けると同く、形状の考察に於て吾人は個体形式が直線、円、螺旋の如き直觀の上より及ばず養學的結果と、又此等形式が形態の部分として、相互の關係を形成全體に對する其直觀に對する關係及び直觀に對する同屬性より起る結果とを區別せざるべからず。即換言すれば、形式要素の表強的旨趣と調和的旨趣とを區別せざるべからず。色に於けると全く一方は形式の調和的旨趣、他方は於ては表強學的旨趣に基くものあり。至りて表強學的旨趣より全然獨立する要素を得るに至りて、表強學的旨趣

表現の表

の範圍を超越して進むとは明ふり。倣ふは直線は其特  
殊なる表辨的旨趣を有し、或る条件の下に自ら養的結  
果を成すものあり。或る他の自ら養的なる要素、例せば  
は波状線の如きものと結合する時は、兩者の間に於ける  
關係、其養的なる向ふを定めれば決して調和的結果を生  
ずるものと能はず。却て醜的結果を生ずるものあり。故に  
形式調和學に於て、(全く色彩調和學に於けると同じく)養  
學的結果の生ずる所以のものは、形式、其養的の美性にあら  
ずして、寧ろ一形式が他形式に對する關係の美性に存す  
る故あり。

形式表辨論

第一に、限界に於る概念に立戻りて論ぜざるべからず。蓋し、

これを明にするにあらざれば、一般に形なることは考ふべ  
あざざればあり。限界とは、これを物体の物質性より抽象  
するとき、純粹なる數學的觀念に外ならず。即ち、  
線は二形式の間を存するものあり。(或は、  
間、線は二面の間、面は二体の間の限界あるが如し)上  
に述べざる三種の視法に相當して、限界は三種の形式を有  
す。即ち線的限界、面的限界、及び體的限界、これあり。  
線的限界に屬するものは、復歸せざるも、此即ち直線、單曲  
線、波状線、螺線、拋物線等にして、面的限界に屬する  
ものは、復歸する線を以て現はざるも、此、即ち直線よ  
り成るもの又は三角形、四角形等、及び曲線より成る  
もの、此等は、円形、楕圓形等あり。而して體的限界に屬す

るもの **直線** 的形体 **正** 方体、**角** 錐体等の如き、  
曲線的形体 **球** 体、**卵** 形体等の如き、**直線** と **曲線** と  
が合成せし形体 **円** 柱、**円** 錐等の如き **あり**、  
要するに **此等** の形は **意** に **一般** 養學的見解に於てのみならず、  
**天然** 美及 **藝術** 美の結果に對する **物質** 的關係に於て  
**根本** 的價值を有するも **此** あり。

此等の形を比較するときは、**多** 様の形態を呈する  
にも拘はらず、**吾人** は **此等** 一切の形を **二種** の原的模型、  
即 **直線** 性と **曲線** 性の對立に **分割** 還元すべきを知る。  
而して **更** 前者は **即** 靜穩を **表** はし、後者は **即** 運動を **表** はす  
ものにして、**此** 兩者の對立は **吾人** が **已** じ **崇高** 美の直觀  
對立に於ける **根本** 的基礎として **知** れるものあり。故

例 **を** 以て、**假** 令は **正** 方体及び **角** 錐体 **の** 如きは **確實** 及び **不** 變  
性の印象を **与** へ、**球** 体の如きは、**唯** 一点に於て **平面** は **靜**  
止するが故に、**轉** 運動及 **變動** 性の觀念を **惹** 起するも  
の **了** して、**此** 觀念は **天然** 及 **藝術** 形式の形態に關して **表**  
顯的性質を有するも **此** あり。次 **吾人** は **又** **直線** 性の形よ  
り **曲線** 性の形に移る **過渡**、**並** に **單** 一形より **複合** 形に至  
る **過渡** に於て、**一** の **漸** 的發達の存することを **知** る。而  
して **此** 發達は **又** **養** 學的階級として **價** 値を有するもの **不**  
り。故 **直線** は **一** 般 **直線** より **一** 層 **高** き養性を有するもの **不**  
み **あ** らず、**更** 直線性の **範圍** 中 **に** **あ** りても、**波** 状線は  
**單** 曲線より **稍** 正 **円** より **卵** 体は **球** 体より **一** 層 **高** き  
養性を有する **あり**。故 **具體** 的 **自然** 養の **範圍** に於て、**有**

機的發展の階級として、上述の如き進動を見るは敢て奇  
し~~可~~に足りず、~~論理的~~の必要の結果と謂ふ可~~し~~なり。  
實~~に~~天然が益~~の~~形態發展の度を進むや壺に愈~~々~~  
直線性が曲線性に其地を譲るのみならず、今時は單一形  
は減じて複合形の起るを見るあり。~~例~~は結晶形成より  
植物形態及動物形態に至る發展に於て見るが如く。然~~し~~  
ども壺に天然養性の範圍に於て、~~此~~静穩直線性より  
表はざるより運動曲線性に由て表はざるに移る進化  
的階級、~~即~~換言すれば運動増進の理法に存在するのみ  
ならず、又藝術養性の範圍に於ても無條件的~~に~~然るを  
見る事~~可~~。然~~れ~~ども之~~を~~就て精細なる証明を與へ~~ん~~は  
藝術論に屬するが故よ、吾人は此處に次の如き説明

を以て満足せざるべからず。即ち一藝術より他藝術に  
移る過渡(空間的範圍)に於ては、建築彫刻、彫刻より  
繪畫に進むが如き、時間的範圍に於ては、音樂より狂言  
に、狂言より詩に至るが如き)に於てのみならず、又各藝  
術の發達進程(例~~は~~希臘塑像に於て、アルケイア時代よ  
り文雅時代よ、文雅時代より第二全盛時代に移るが如き)  
に於て運動増進の一樣なる理法の行はる、を見るあり。  
而して、理法の普遍的價值を証せ~~ん~~は、~~此~~が基礎~~と~~  
各系始的の形式~~を~~一層精密なる考察を要するあり。  
~~例~~單直線及此等直線より成る一切の形~~は~~、美感  
に對して、~~静穩~~の要素を表はすとは吾人が前~~に~~言へる  
所~~に~~が更~~に~~又水平線及~~此~~直線は、抑壓の要素を有する

故に水平、鉛直ならずして、傾斜せる線は運動の要素を有せざるも、少くも一層高き養性より移る進程として考へざるべき運動直観の上は不安の結果を惹起するものあり、或は墜落運動より延びて損傷及破壊を回想せしむるものあれば、若し其れ、その不安と其相結合せる嫌忌との感情を去らんと欲せば、傾斜せる線は、反對の方向に、一様、傾斜せる他線よりて支へらるゝを要する、而して、これ、底線を加ふるときは、即ち三角形を成す、**是**は單獨の直線より、一層高き確實の感情を惹起するも此あり、而して、美學上最も満足ふる印象をふすものは、等邊三角形なり、**華**、其底と高さとが最も適當なる關係を有すればなり、鋭角等脚三角形は鉛直線より

175  
近き故に、確實の感を害し、鈍角等脚三角形は水平線より近き故に、抑壓の感を惹起するあり、四角形は於ける静穏及び確實の感は、三角形より於けるより、**然**れども、廣さの増加は、欠点を補ふに足る、直線性の原理より起る体的形式、例は立方体、角錐体の如きは、之を構成せる諸平面相互の間は於けると相類似せる養學的關係を、まゝ相互の間に有するも此あり、即ち角錐体の立方体に對する關係は、三角形の四角形に於ける關係に類似する可如し、而して、其体を限界する面の数の増加するに従て、益、球体より近くと共に、直観の上は益、確實及び静穏の減失せるものありとす。

